

やうな氣がしてもちく／＼して居ると、

「御目出度いッてねえ？」

と笑ひながら母親がいふ。

「……………」

「月のものを見ないんだらう？」

「え、」

と辛うじて返事をして顔を赧くした。

「結構だね」

病人は珍らしく上機嫌で、「初めてだから大切にしないと好けないよ。何だか此間から様子が變だと思つて居たけれど……矢張さうだつたね」

「……………」

「何でも心配しないでね、氣を緩くり持つて居ないと好けないよ。初めには様子が分らないから兎角苦勞なものだが無理さへしなけりや何の

ことは無いからねえ」と他かす嫁の顔を見て、「餘程前にね、お前が懐妊した夢を見たことがあつたから、實はもう出来ても好さうなものだと思つてたのさ……それからお前が赤ちやんを抱いて居る處を見たこともあつたよ。こんな風に横ツちよに抱いて、小兒が苦しうにして居るところなのさ。夢つて言ふものはおかしなものだねえ」

病氣をも忘れたやうに機嫌よく、「其時分子供が出来た時と思つて少し襦袢などを集めて置いたから、鳥渡、それを出して御覽」

座敷の押入を見よとのことである。で、お梅は立つて床の間に接した方を明けると、「いゝえ、其方ぢやない、向の方だ」と教へる。別の方を明けて見たが、上段には書籍と雑誌とが一杯下段には古い長持が長く幅を置いて居て、其上に種々の道具が置かれてあるばかり、それらしいものも見えぬ。まご／＼して居ると、

「其處に無いかえ、大きな風呂敷包だが……」

「御座いませんやうです」

「それちや思違ひか。その向ふの縁側の扉を開けて御覽」

果して其扉の隅に色の褪せた大きな風呂敷包があつた。それを持出して、『これで御座いますか』と聞く。

「それ〜」と病人が點頭く。

枕元に持出して言ふがまゝに開けて見る。襦袢が幾箇となく出て居る。大きいと小さいのと。風呂敷の底の方には、いろ〜の襦袢が一杯。母親の娘時代に着た衣服の片のぼろ〜になつたのや子供達の稚い頃の筒袖の断片などもごた〜と一緒に丸めて交つて居た。

「御産をする時には襦袢が澤山用るものだから汚らしいけど、寄せ集めて取つて置いたのだよ。襦袢も今ではとてもかう纏めることは出来な
いんだけれど、四月頃だつたから、それだけ出来たんだから」
「こんなに澤山に……」

と、襦袢を翻しながら、若い細君は姑の真心を嬉しく思つた。

「家を持つて行つてお置き」

「何うも難有う御座いました。」

禮を言つて、風呂敷を元のやうに包んで、そして座敷の隅に置いた。

「少しさすりませうか」

と傍に寄ると、まじ〜とお梅の顔を見て、

「丈夫だと世話をして遣るんだけれど……」

いかにも悲しさうであつた。

やがてお梅は後に廻つて足を摩つた。瘦せたのが著しく氣に懸る。心地好ささうに並べて二本延して居るが、それが爪に灰色で、血の氣が無く、脛など阜斯の足のやうに細くなつた。

かうした病人の優しい情も總て一時の發作であつた。泣くのも笑ふのも怒るのも痲癩を起すのも皆同じやうに死の不安と恐怖とから來るもので或時などは身の置所の無いやうに焦れて焦れて焦れ通すとなどもあつた。新芽の發生につれて古葉の凋落するやうな苦痛は常に力強く其胸を襲つた。

襦袢を出して呉れた情は初め若い嫁の若い心を感じ泣せしめたが其時から其言葉とは反對にお梅は其身に對する姑の態度の著しく變つたのをそれとなく感じた。變つた著しく變つた！お梅の肥つた血色の好い顔を見たり無邪氣な早曲な快活な言葉を聞いたりすると病人は今迄はそれが見たりも言へず希望に充滿して居るやうな氣がして——その柔かい手で肩なり足なりを摩られるのを此上なく楽しいやうに感じて居たらしかつたが懷妊したと定つてからは一種の冷たい情が病人の胸に萌して、艶に憔悴した顔や目の周圍に何處となく出來た暗い影や、そろ／＼眼に

立つて來た乳や氣怠るさうな立居振舞やすべて肉のしまりの無い放恣な形を見ると今迄自分のものであつたものが俄かに自分を背いて捨て去つたといふやうなさびしい辛い腹立しい氣が起つた。

お梅は足を摩つても以前のやうに喜ばないのを始めの中は不思議に思つた。何うかすると、「もう好いから彼方に行つてお出で！」などと音なく言ふ。莞爾した顔——お梅に對してのみする莞爾した顔ももう見られなくなつた。何か氣に入らぬことでも爲たのかと思つて夫に話して見たがそれらしい様子も無かつた。

銚之助の多感な心では妻が懷妊したといふことが何だか不道德な罪惡のやうな氣がせぬでもなかつた。昔は親の喪三年の間夫婦は室を異にしたといふことがある。親を傷むの情しかあるべきことである。古い支那の道徳の教が不思議にも新しく銚之助の胸に反響した。

生活は矢張苦しかつた。月に二十圓の收入を得るのが困難であつた。

全力を擧げた長篇小説は全然失敗して、二百枚ばかり書いて破つて捨てて了つた。翻譯の安仕事、空想ででつちあげだ紀行文、そんなものを賣つて總かに生活を續けた。それに、漸く名を出し始めた身に、雨霞と注ぎ懸けられる罵評、それが何よりも辛く痛かつた。

結婚當座の甘い快樂も、段々と薄らいて行つた。半年位経つた頃は一番破綻の生じ易い時だといふ。表には平和を装つて居ても、腹ではいろいろな不平が萌す。銑之助の此頃の胸は亂れ果て、居た。

四疊半に居る頃は、煩悶も苦痛も要するに美しい空想であつた。今のやうに、實際に觸れた苦痛は更に經驗したことはない。色彩を着けて、價値の無い悶で濟して置くことの出来るものではない。色彩を着けて、價値の無いものにも、價値を興へて、好奇に快感を買つて居るものでもない。そしてこの切實の苦痛が、母親の死を待つ念と一緒になつて、銑之助の頭腦の中を廻轉する。

若い細君は、身體の加減で、稍憂鬱に傾いて來た。平生の無邪氣も、いくらか暗い影を帯びて、何うかすると縁側の隅で眼を赤くして居ることなどもある。氣怠るいと、言つては、よく横になる。粉飾を爲るのも、臆劫らしく、丸髻の塊れ懸けたのを、梳らうともしなかつた。

袂には、青梅がいつも入れられてあつた。

二十一

青森を午前九時五十分に出た汽車は、夕暮近く、北上川に沿うた平野を平泉に向つて駛つて居た。藤原氏三代の偉業西の京に模した市坊は、今も猶殘滓と礎と古寺とを留めて、金色堂の古色は、暗い杉樹の裡に、其光を殘した。水の流れ山のたゞすまひ——忙しい汽車の旅をする人も、この形勝の地を徒に過ぎ去るものはない。一しきり其古蹟の物語が、車室の此處彼處に起つて、義經の戦死した高館の丘陵を指し合つて居るもの

があつたが、不圖、二等室の車窓から少尉の軍服を着けた色の淺黒い顔が覗いて、夕日がその片頬を眩しく照した。

軍帽を右の手に押へて、金鷲山の方を飽かず見て居たが、衣川の鐵橋をといろに汽車が渡り始めると、其儘顔を引込めて元の席に復した。傍にズツクの大砲が一箇、あけび細工の手提が一箇、旅行案内に文藝俱樂部新刊の偕行社記事が讀さしの儘に其上に伏せてあつた。前には仙臺の商人だといふバナマ帽が唯一人相對して乗て居た。

この軍人は吉田秀雄であつた。

秀雄は仲兄のことを考へた。仲兄が有名な旅行家で、此附近を跋渉して盛岡から秋田を踰えた時の物語を思ひ出した。續いて其身が弘前に赴任の途次古蹟の遊覽に汽車に乗後れて、一夜を停車場前の汚い旅店に過したことを思ひ出した。昨年の大演習に此街道を南下して南軍に小半田附近で接觸したことを思ひ出した。其時味方の大隊は聯隊の主力

となつて、轟地に敵の中堅を衝いた。低い松原があつた。狼狽した敵を追つて追つて追ひ捲くつた。あの時ほど愉快なことはなかつた。かう思ふと、露營の光景夜遅く或地點に着いて炊事當番の忙しい眼に逢はされたことや、急な命令に接して、遅い夕飯をも食ひ敢へずに出發した難儀などが頻りに思ひ出される。續いて弘前の練兵場の黄い凄じい埃の中に、自分が眞黒になつて、兵を教育して居るさまが眼に見える。突然窓外の風景にまぎれて忘れて居た昨日の電報のことが新しい鋭い力で頭腦を打つた。「ハ、オモイツゴウシテコイ」この電報を受取ると、急いで中隊長の許に走つた。そして一緒に大隊長の處に行つた。暑中休暇までまだ十日ある。それを頼んで都合して貰つて、下宿に歸るとすぐ準備に取り懸つた。母の容體が氣に懸る。三月に行つた時からとても治らぬ病氣とは覺悟して居たが愈々となると、離れて居るだけに心配になる。急いで土産物を整へた。園ひの林檎をも數多く買つた。下宿して居る家

の母親に話すと、それはくどさも驚いた風で、何彼と世話をして呉れた。階級の下の暗い處に色の白い娘が立つて居た。ソツと手を握つたのを誰も知らなかつた。

難かしい昔氣質の祖母が其家に居た。孫娘は其祖母に殊に愛せられて居た。二人の交情が覺られやうものなら、それこそ大變である。津輕氣質として短刀位突つけられるのは覺悟しなければならぬと娘はよく言つた。それに戀する秀雄に取つて今一つ重大な心配があつた。祖母の同じ孫で、娘の従兄に當る財産家の息子があつた。祖母の腹では無論それに孫娘を妻はせる積である。父母は稍々當世で、血族結婚に不賛成であるが、——娘も東京から來た士官の若々しいのに胸を動かしては居たが、一家に無上の權力を振つて居る祖母は容易に其を聽きさうにもなかつた。

朝弘前を六時に發つた。娘は母親の後に立つて、悲しさうにして見送

つて居た。昨夜、何うかして好い機會を作つて、いつものやうに娘をこつそり二階に呼ばうとしたが、秀雄は其の目的を達しなかつたのである。一の關に着いた時は、もう日が全く落ちて居た。辨當を賣る聲が賑かに聞える。秀雄は立つて隠袋に錢を探つて窓から辨當と茶とを買つた。

汽車は轟々として夜を駛る。車燈の油の光る下に、秀雄は横に倒れて、寝て此一夜を過さうとした。

けれどとうとうとするとすぐ覺める。小さい薄暗い六角の釣洋燈が幾箇所となく同じやうなさびしい田舎の停車場をぼんやりと照した。

半眠り半覺めた頭腦にいろ／＼なものが通る。聯隊本部の將校室、大隊長の黒い難かしい顔酒保の男の耳の疣死に瀕した母親の皺だらけの顔、何處かの演習で怪我をした兵士の血だらけの姿ふと娘の白い顔が見えて眼が覺めた。

自分の室がすぐ浮んだ。二階を上ると六疊と四疊半、四疊半は物置に

なつて居る。六疊には床の間が附いて居て、四季をりくの花を娘はよく活けた。始めて其處に寄宿した時のこと、娘の可愛らしい姿を見た時と、それから今一つ或ることを思ひ出した。娘を頭腦に描くと何時でもそのあることを思ひ出すのがかれの此頃の例になつて居る。もう自分のものだ！といふ念がすぐ湧き返つた。祖母が難かしからうが、父母が許さなからうが、娘は既に自分のものだ。かれは心にかう繰返した。二階の階梯をこつそりと上る微かな足音がする、衣裳の物に觸る氣勢が待焦れた耳に分明聞える。六疊の障子は半分ほど明けてあつた。二階は眞暗であるが、下座敷に行燈がぼんやり點いて居るので、階梯を上つて来る娘の顔は白く見えた。

『もう自分のものだ！』

とかれは再び思つた。嬉しさが胸一杯になる。

祖母はその愛せる孫娘をその身のあたりから離さなかつた。寝る時

も其室に一緒に床を敷かせた。晝間は琴を弾かせたり、昔の繪本を讀ませたり、花を活けさせたり、茶を立てさせたりする。秀雄はよく其祖母と物語をした。快活な無邪氣な正直な青年士官の性質は、其家の父母のみならず、昔氣質の祖母をも喜ばせるに充分であつた。

娘は光子と言つた。同僚が来た時、娘が秀雄の室に居たので、段々感づかれて宴會の席で散々冷かされたことなどもある。會の崩れに以前はよく誘はれて一緒に伴れられて行つたものだが、其頃から、「君にや光子さんが附いてるから、誘ふのは氣の毒だ」などと言はれた。けれどまた其時分は戀をしては居らなかつた。光子でなくてはならぬやうな氣も爲なかつた。寧ろさうした冷かしやら評判やらが遂に戀に落ちる材料となつたのである。

戀を得た今は別離が辛かつた。それに、此頃俄かに迫つて来た從兄との結婚談が心配になるので、

『何うかして、今度行くのを機会に、兄に話して、具合が好かつたら母にも話して、公然妻に貰ひ受け度いものだ』と思つた。けれど今の場合とて、もその出来ぬことは自分でも知つて居る。

氣が附くと、汽車が停つて居るので、何處かと思つて、身を半起して秀雄は窓外を見た。停車場の六角燈の上部の青い處に白ぬきに地名の平假名が出て居た。

『おほがはら』と微かに讀める。

時計を出して見ると十時半である。

まだ中々だ、寝やうと思つて再び横になる。仙臺で大分乗つたやうだが、それでもまだ車室は空いて居た。汽車が動き出すと好い心地になつて、すぐうとくする。又同じやうにいるくなことが頭腦を通る。今度は母親の顔が一層歴々と眼に附くやうになつて、それと重り合つて娘の笑顔が見える。『ハ、オモイ、ツゴウシテコイ』オモイといふ字が繰返し

繰返し氣に懸る……

いつか眠つたと見えて、秀雄は福島を通るのを知らなかつた。

那須野を通越すと、明らかな朝日が昇つて、鬼怒川の清い流が閃々と美しく光つた。秀雄の胸は愉快で穩かたで、そしてのんびりして居た。自ら不思議に思ふ程母親のことを考へて居ない。かと言つて暗い家の光景や、病人の瘦せ衰へた姿を眼に浮べぬのではないが、それは餘り此身とは關係が無いやうに思はれる。母親が苦勞をして、吾々兄弟を養育して呉れた大恩に對して、何うか今五六年丈夫で生きて居て呉れて、思ふやうな樂をして貰ひたいとは、それは常に念頭を離れない願であるが、抵抗すべからざる力と相面しては、其願などは如何にもすることが出来なほど、小さいものである。若い者は若い者の道を進まなければならぬ。

美しく晴れた空のやうに、明らかに輝き昇つた朝日のやうに、または四邊の天地が生々とした緑に包まれて居るやうに、其胸に若々しい希望が満

ち渡つた。

小山に来て、朝飯を食つた。もう東京がちぎである。旅行案内を繰ると、七時四十分には上野に入ることが出来る。秀雄はふと立つて傍の手提の中をさがした。既のこと忘れて来やうとした光子の寫真が白紙に包まれたまゝ、其中に入れられてある。手札形の小さい寫真で、昨年の夏撮影した單衣姿であつた。

顔の長い眉の美しい、ほつそりとした姿で、丈も何方かと謂へば低い方である。成程容色が好い、鳥渡この位に眼鼻立の揃つた娘は少い。殊に眼が美しい。表情があると謂ふよりは、寧ろ落附いたといふ方で、此眼は餘り複雑した感情を顯はして居ないが、美しいことは此上なく美しかつた。惜しいことには、扮装は何うしても田舎風である。桃割に結つた髪の方などどこか舊式である。津輕少女の訛のある言葉——秀雄はその愛

らしい津輕訛を不圖思ひ出して堪らなく戀しくなつた。

暫くしてそれを元の手提に藏つて、今度は紙に包んだ林檎を一箇出した。紅く艶々して、何だか津輕少女の匂ひがこの一顆の菓物にも出た。居るやうである。秀雄はナイフをチョッキの隠袋に探つて、皮を剥き出した。不圖傍に二十七八の丸髷の婦人が七歳位になる可愛い男の兒を伴れて居るのに氣が附いて、手提から今二箇出して笑ひながら男の兒に遣つた。秀雄は子供が好きである。

男の兒は嬉しさうな顔をして、軍服を着けた青年士官を豪さうに見上げた。婦人は「好いことねえ、ママ」と謂つて幾度か禮を述べた。

利根川の長い鐵橋を汽車の渡る時、秀雄は母や祖父母と一緒に買切の川舟で東京に出た折のことを思ひ出したが、栗橋、久喜、大宮、赤羽と急行の列車は逸早く過ぎて、王子の烟筒に漲る煤煙をも後にやがて上野の停車場に着く。

停車場から車を備つて秀雄が喜久井町の宅に着いたのは八時半過ぎであつた。低い門庭樹の繁茂縁側には張物が出してあつた。車の門前に留つたのに気が附いて井戸端に居るお米が振り返ると眼に映つたのは立派な若い軍人姿！

「まア秀だよ」と飛出して来た。

七八年逢はぬので今更のやうに姉弟の胸は跳つた。

「母様は？」萬事を擱いて秀雄が訊くと、

「今日は少し好いやうだけど……好いが好いでないものだから」かう言つたがすぐ縁側に飛んで行つて、

「母様秀が来たよ」

青年士官は剣を引摺りながらやがて其晴やかな軍服姿を縁側の前に

立たせた。

病人は涙を流して喜んだ。けれど其喜びはやがて深い悲哀である。抵抗することの出来ない力に對する悲愁は血を分けた親と子の全身の脈を動かした。

頬を流るゝ老母の涙と秀雄の黙つて背けた顔とを同じく黙してじつと見て居たお米は堪らなくなつて自から顔を掩つて泣出した。

秀雄は嚴然と坐つて顔を背き勝に低頭かせて瀧津瀬と胸に集つて來る涙を自から下唇を噛んで押へた。

一座は深い沈黙に落ちた。

けれどもそれも瞬間であつた。涙や悲哀は長く續くものではない。時ならずして其沈黙は破られ其涙は乾かされ其悲哀は薄らいで行く。

病人の枕元には紅い美しい數顆の林檎と土地の名産の林檎羊羹とが並べられる。病人は此頃は殊に食慾が進まない。それに食つてもすぐ

反して丁ふ。また旨く納つたにしても腸の痛むのが恐ろしい。でも折角秀雄が遠くから持つて来たのだと謂ふので、一番味の好きさうなお米は選んで半分に劈いて皮を剥いて小さく割つて、その儘手に持たせると、病人は秀雄の顔を飽かす見ながら、それをさも旨さうにサクサクと音させて食つた。

主人は役所に行つて留守、お桂も薬取りに行つて居なかつたが、やがて歸つて来て、初対面の挨拶をする。銑之助もそれと聞いて書き懸けた安原稿の筆を擱いて、急いで裏の家から遣つて来た。

銑之助は秀雄の相變らず元氣で快活なのを羨しく思つた。軍服を軽い紺緋の單衣に着替へて色の淺黒い頭の丸い莞爾した苦勞の無さうな顔をして、頻りに無邪氣なことを言つて笑つた。林檎を選んで手づからナイフで皮を剥いて、『銑ちゃん……これが旨いよ』など、自から勧めた。

お米は秀雄の成功を目を聳て見た。幼稚い頃母の手だすけに世話をよく見て遣つたので、情合が何となく厚い。それに久しくぬから懐かしくもあるし、力にする氣にもなる。『銑は若い女房に讀まれるやうな男だから駄目だ！』とお米は此間の衝突から銑之助を除き快く思つて居ない。

秀雄は母親の病氣を思つたほどではないと思つた。それは衰弱したのは事實である。三月來た時とは丸で見違へるほど瘦せ衰へて了つた。顔色も悪い眼も光が無く一種のうるみを持つて來た。けれどももう間もない暑中休暇をも待たずに、電報を打つて寄越した位であるから、もつと危篤であると思つた。事に寄ると、死目に逢ふことすら出來ないかと心配した位であつたのである。

銑之助は其病狀を詳しく語つた。時々、の烈しい疼痛、食欲の減退、身體の衰弱、神經が昂進して機嫌の悪いのが一番困るといふことから、死期の

No 7

迫つて居ることをも残りなく話した。秀雄は唯點頭くばかりである。其處にお梅が来て挨拶したが、その憔悴した姿に秀雄はすぐ眼を着けて、

「姉さん何うしたんです……夏まけですか」

「いゝえ、さうぢやないよ」

とお米は傍から口を挿れて笑つた。

「何うしたんだい？」

「つわりだよ、お前」

「もう出来たのですか、早いナア」

と秀雄は快活に目を睨る。

午飯を済してから、昨夜よく寝なかつた少し休まうと謂つて、秀雄は四疊半に入つたが、間もなく高い屏が聞えた。お米が行つて見ると、枕もせず、大の字なりに顔を上げて口を開いて熟睡して居た。

二十三

これで同胞は皆集つた。容體が重いと云ふので、親類の人々は代るく見舞に来る。菓物の籠、鶏卵の折、珍しい菓子など多く床の間に積まれた。

今一目逢つて死に度いとまで願つた秀雄も、来て見ればそれほどでもなかつた。泣いて貰つても、悲しんで貰つても、慰めて貰つても、要するに其身は獨り死ななければならぬのであつた。

一家の人々も長い看護に全く疲れ果て、了つた。治る病人ならば張合がある。一度全快させて喜ぶ顔を見度いといふ希望も起るが、醫師も唯毎日形式的に診察して行くばかり、全くの對症療法で死ぬ病人治らぬ病人と始めから多寡を括つて居る。病人はそれでも容易に死を自覺することが出来ず、少しでも氣分が好く、腹でも痛まないと、これで食ふもの

さへ食へれば治るかも知れぬなどの希望をも起すが看護するものは、これを見て居るのがいかに辛い。ことに世話の難かしい機嫌の變り易い病人なので、それが各自の心やら境遇やらから起つて來る紛紜と一緒になつて、何うせ生命の無いものならば、といふ氣に時々なる。そんな考を起してはと誰も自から押へるのであるが、しかもその念を留め得るものはなかつた。

一家が總て浮足になつてそはそはして居た。主人は費用の多くかゝる上に眼に見えて居る葬式の金の出所に就て日夜苦勞した。銑之助も秀雄も金を才覺するやうな柄ではない。相談をして見た處で駄目なのは知れて居る。二三箇所先輩に泣附たなら何かして呉れるとは思ふが、さて其先輩にも結婚の費用などで、既に既にも多くの迷惑を懸けて居た。銑之助も此頃それと感附いて、兄を扶け度いものだと思ふ。けれど自分の生計すら辛うじて凌いで居る身には、何うすることも出来なかつた。

秀雄はそんなことゝはゆめ知らず、

『まだあれではなか／＼死ぬやうなことはありやしないよ。暑中休暇になつてから來ても遅くはなかつた』

などと言つて居る。來てからまだ二三日経つか經たぬにもう單調なる生活に厭きて、古い小説を挿入の中から引張出して、四疊半に寝ころんで、それに讀耽つた。そして退屈すると、その書籍で顔を掩つて、いきななく晝寝をする。

裏の家にもよく出懸けて行つて、

『銑ちやん居るか』

と門から怒鳴る。士官學校時代と調子が少しも變つて居ない。銑之助は仕事の邪魔をされるのを此上なく恐れて居るが、秀雄はそんな遠慮は無く、つか／＼と座敷に上つて來る。銑之助が筆を擱かうが、擱くまいが頓着せず、すぐいろ／＼な雑談を始める。前に釣つてあるハンモツ

クに身を横へて、『こんなものより藤椅子を買へば好いちやないか。藤椅子の方が好いせ』などいふ。
琴が袋に入れられた儘床の間に置かれてあるのを見ては、『嫂さん此頃は琴も弾かないのか……僕は上手になつたせもう嫂さんに負けやしない』

秀雄が三月に來た時から比べると本家も裏の家も總て心持が變つて居た。お鐵がお桂に變り、それにお米が來て互に絶えずれ合つて居るので、調子に何處か合はない處がある。それに病人の重くなるに伴れて、人々の苛々した調子が何となく不愉快だ。

裏の家ももう以前のやうに楽しさうでも賑やかでもなかつた。夫婦は黙つて居ることが多く、殊にお梅は妊娠の故でもあらうが、眉の邊に何處となく淡い影が生じて、立居も勝れずをり、辛氣さうに嘆息をつく。畠には玉蜀黍ががさ／＼と高くなつて、廣葉の蔭にもう熟し懸

けた實の黒い毛も見える。

秀雄の身の上も變つた。

二十四

秀雄が餘り暢氣らしく閑暇な身を持餘して居るのを見て、お米は笑ひながら、

『お前少し看病して上げたら好いちやないかねえ、折角態々來たんだから』

『うん……』

と氣の無い返事をして、病人の枕元に烏渡坐つては見るが、別段手を下して爲ることもないので、直き四疊半に入つて了ふ。夏の日影は次第に暑く、病状も日毎に重くなつて行く。

低い屋根の安普請奥行が淺く、座敷の前後が縁側になつて居るので朝

に夕に日射が近い。殊に午後四時から夕日は座敷の半まで射込んで来て、その暑さと言つたら一通でない。それに廁がそのすぐ側にあつて、穢いもの、乾く臭氣が堪へ難く人の鼻を襲ふ。蒲團は成たけ清潔にして敷布は絶えず洗濯するやうにして置くが、死に近い病人には、床摺れの糜爛や長い間の汚れた皮膚の悪い臭氣がそこなく纏つて吐く呼吸も健康者の鼻には夥しく不快に感ぜられる。従つて蠅が多い。打つても打つても煩さく其周圍に集つて来る。棕櫚の葉を麻糸で結んだ蠅打が血で汚くなるまで打つても、容易に其数は減じやうともしなかつた。ありもせぬ錢で硝子の蠅取器を一個主人が買つて来て、それを座敷と茶の間との間の上に置くと、時間の間に黒くなつた。

親として曾て子等に對した權力はもう無くなつて了つた。家庭に種種の波瀾を起し、壓制的に子等を壓迫した當時の勢力も認められなくなつた。もう嫁が厭でも、交情の睦じいを見せつけられても、自から其身

の不運不幸に忿怒の情を起しても、如何ともすることが出来なくなつた。親は親である。子は子である。子等の胸はこの難しかつた母親——理由の無い烈しい慾望の爲めに苦しい悲しい犠牲を敢てさせられた——そのむづかしい母親の亡くなつた後のことを想像するやうになつた。

銚之助には殊に其想像が強かつた。垂死の一塊物に對する不愉快の情と、不幸なる母親の一生の運命に同情する心と、自己の將來に於ける不安の念と、この三つが一緒になつて常に凄じい波を擧げた。兄弟の中銚之助が一番頼りの無い心細い境遇である。それはお米も心細い。不安である。けれどお米にしる主人にしる秀雄にしる世間に觸れて世と共に浮び且つ沈み得る人間である。世は世に觸れた人間を捨て、了ふことは滅多に無い。銚之助は文學を天職とした其身の苦痛を今更のやうに辛く覺えたのである。

ある時銚之助がこれを秀雄に話すと、秀雄は寧ろ兄の例の癖とばかり

生
で、『また始つたね、そんなことを言つたつて仕方が無いぢやないか』と笑つた。

二十五

醫師はもう五六日しか持まいと言つた。食物が殆ど通らなくなる。腹が痛むと弛んだ澤の無い皮膚からは油汗がダク／＼出て衣を浸した。苦しい苦しいと言ふ聲は垣の外を行く人にも聞えた。お駒も来た。お貞も来た。一家は更に一層の混雑を加へた。代診が其度に来て注射をして行く。初めはそれで稍落附いたものだが後にはカンブルの注射位では餘り長い効能が見えなくなつた。さりとてこの衰弱した患者に、モルヒネを注射することは全然不可能であつた。

少し落附いた時には、それでも病人は口を利くが、もう肝癢を起したり

物を投り附けたりする元氣は無い。看護する人の顔を見てはほろ／＼と涙を翻し、秀雄の手を堅く握つては、もうこれがお別れだ！などといふ。弱い弱い人になつて了つた。秀雄が脈搏を取つて見ると、餘程早く且つ不整である。呼吸もさもなく苦しさに吐く。

をり／＼便の催すのをさし込の便器で取つた。病人は性來潔癖で、起き返へられなくなつてからも、便をする時だけは、お米の手を假りて辛うじて身を起したが、四五日前からは、もう何うしても其自由が利かなくなつた。體に締りが無くなつて、起返ると頭腦が眩惑する。で、やむを得ず寝たまゝ取ることにしたが、始めは馴れぬので一方ならず困つて洗腸までした。けれど近頃では何うやら斯うやら用を辨するやうになつた。瘦せこけた脚を二本立てさせて、便器を其處に挿込むやうにするのである。

隣近所でも病人の段々重くなつたのを知つた。人の出入が非常に繁くなる。車がをりをり来て其門前に留る。丸指の細君が来る。切袷の老婦が来る。洋服の紳士が来る。狭い玄關の靴ぬぎには、駒下駄やら、雪駄やら、足駄やら、編上げの靴やら、殆ど足の踏處も無い位。勝手は相變らず汚なかつた。老母が喧しく言つて、銀のやうにてかく光らせた釜も赤い錆が出て黒くなつた。釜の底などは十日に一度も庖丁で搔くことがないので、煤が厚く厚く積つた。七輪には物の煮え立つて吹き滴れた痕が條を爲したまゝになつて居る。お桂は勝手に自分の唯一の勢力範圍にして、襦袢を懸けた儘其處を連れてぐづぐづして居るのが例であつた。飯時分になると、茶湯壺が出て、茶碗と箸とが筒單に其上に並ぶ。多くは馬鈴薯の煮付か、豆腐汁か、鹽の辛い鮭か、煮豆か、乾物かが菜として顯はれる。

「豆腐ばかり食はせられて、こんなに瘦せちやつた。銚ちやん、何

も御馳走して呉れないか」など、秀雄は裏の家に行つて言つた。母親は「己が死んだら、佛壇や神棚など何んなになつて了ふのか解りやしない。御燈明一つだつて上げる奴はありやしまし」と口癖のやうに罵つたが、まだ母親の死なない中から、佛壇も神棚も全く閉却されて、塵埃が一杯に積つて居た。

夜は二人づゝ起て居ることにした。病人は落附いて居る時は唯すやすやと寝るばかりであるが、痛み出して來ると、唸聲が烈しいので、隣の人も寝られぬといふ程である。けれど家人は連夜の看護に勞れ切つて、狭い蚊帳に蝨をつけたやうにぐつすりと寝込んで了つて、眼など覺すものはなかつた。

一夜銚之助がお桂と夜伽をして居ると、前の田に水鶏の聲が面白く聞えた。渠は立つて戸を明けた。

夜はもう十二時を過ぎて居た。曇つて暗い空を透して、梅樞檜百日紅

などが更に暗くこんもりと影を重ねた。四邊は全く寂靜つて阪の上の二階屋の門前の瓦斯燈が覺束なく點いて居るばかり、蛙の聲が田やら畠やらに満ちて聞えた。

低い田にちよろ／＼と流れ込む小川があつた。草が流に浸つて水馬が晴れた日の影にのどかに遊ぶ。蜻蛉のつるんだのが水に尾を落して休んで居ると子供が長い釣竿を寄せて、拔足差足近寄るのを常によく見懸けた。今しこの闇の夜に、恰も其の小川の邊を水鶏がこゝと鳴く。

銑之助は庭から井戸端の前の柴折戸のかき金を外して垣の外に出た。胸は何となく沈着いて自然の穩かな靜かな光景に全く一致して了つたやうな心地がする。

渠は母親の一生に同情した。けれどそれがいつもの同情とは不思議にも異つて居た。常には母のかうした境遇に身を置くに至つた経路やら、正直な我儘な性質から萌した悲劇やらに涙を濺いで、快樂といふ快樂

をも遂げずに自から身を亡して行くのを悲むのであつたが、今宵は何故か母親の死が人類一般の死と相聯關して居て、何うせ一度は死ななければならぬ人間の儚さがひしと胸に迫つた。

銑之助の眼には草の生えた墓と生れたばかりの赤兒と白髮の老人と死に瀕した母親とが眼前を通り過ぎた。深い深い生の悲哀が其多感多情の胸を抉つて、熱い涙がほろほろと頬から落ちた。

かうした感を渠は久しく起したことはなかつた。空想の境から實際の人生に入つた身には、さういふ悲哀は要するに粧飾である、繪具である、粧飾や繪具が糧にならぬのは渠自身にもよく解つて居る。けれど今はもう堪らなくなつたのだ。

暗い闇の中に自分唯一人生きて居るやうな氣がした。

銑之助は田の縁の草原に腰を休めた。草原には露がしど／＼に置いて居る。蛙の聲の相變らず喧しい間を、水鶏はこゝとさびしく鳴く。



生

暗い丘の向ふに黒い榛の樹が怪物のやうに並んで立つて居る。淡竹の藪の中に微かな寺の燈火が見えて、其上に星が一つ光つた。突然飛附いたものがある。嗅ぎ驚して立上つたが見るとそれは平生よく馴れて居る近時の野良犬で、嬉しがつて兩足を立て、頻りに銑之助に飛つた。

渠は暫くして家の方に戻つて行つた。庭に入ると一枚明けた戸から行燈の光が洩れて、檐に近い椿が半ほど其微かな餘光を受けて居た。静かに歩いて戸の傍に近寄つた。障子も明放つてあるので、蚊帳の青く風を動くのが見える。母！母！大恩ある母！なつかしい戀しい母！その母にももう別れなければならぬのかと思ふとまた涙が出さうになる。静かに縁側に上つて、蚊帳の中に入ると、お桂が蒼ざめた顔をして、さも物に怖れたといふ風で、聲を低くして、

「銑之助さん、今、母様が……」

がた／＼震へて居る。

「何うしたんです？」

「今母様が怖い眼をして、讒言を仰しやるんですがね」

銚之助は病人の方を見た。成程大きく眼を見開いて居る。

「母様何うかしましたか」

其返事はせず、

「誰だ！其處に居るのは行くのは厭だ厭だ誰が行くものか！」

眼を恐ろしく見張つて手をひろげるやうにする。

「母様母様！」

と銚之助が呼んで見たが通じない。

丁度其前に恐ろしい或物が坐つて居るかのやうに見張つた眼を

と据ゑて氣味悪く空間を見詰めて居る。油汗が額からダク／＼出

「母様母様」

矢張返事が無い。

仕方が無いので、銚之助はお桂に向つて小聲で、

「先程からかうなですか」

「え、今少し先程……すや／＼眠て居らつしやると思ふとねえ、急に聲を立て、誰だ！誰だ！其處に居るのはッて仰しやるですがね。私です、お桂です、何か御用ですかッて聞きますとね、それには御返事を爲さらずに、迎へに来たのか、来たッて、まだ行きやしないぞ！」と仰しやるぢやありませんかね。私怖くつて、怖くつて、何うしやうかと思つて居ましたがね」

「夢を見てるんだね」

と銚之助は無造作に言つたが、それでも何となく無氣味であつた。病人の見張つた眼が微暗い行燈の光に見える。病人は又始める。

Handwritten note: 矢張返事

「迎へに来たッて行かない。厭だ、厭だ！歸つて呉れ、歸つて呉れ！」と手で拂ふ真似をして、「和尚様、私は何も悪いことは致した覚えはありません。私は正直に世を渡つて参りました……」

「母様、母様、何うしたんです？」

矢張通じない。

「何うしたんでせうねえ」とお桂は矢張ぶる／＼震へて居る。

「和尚様……和尚様……」

「母様！」

と、今度は聲を強く見張つた眼の前に顔を出して、軽く肩を揺ぶると漸く氣が着いたらしく、空間を見詰めた眼で、銚之助の顔をじつと……。

「母様！何うした？」

「今其處に朱の衣を着た和尚様が……」

「夢だ、夢だ！和尚様なんか居やしないよ」

「其處に居るぢやないか」
「何處に？」

「それ其處に坐つて居らしやる」
と行燈の陰を指した。

銑之助はギョツとした。お桂は顔を袖で掩つた。
「嘘だよ、誰も居やしないよ」

「其處に居るぢやないかな。お前にも見えないかな」とさも情なさうに、「和尚様何うか今少し……今少し待て下さいまし」
眼がまた据はる。

「折角迎へに来て下さつたのだけれど……今少し……あゝ馬車立派な馬車折角だけれど……私等の乗るやうなものではないから……和尚様……和尚様……」

言葉が断續する。天井では鼠が鼠を追ふのか凄しい音が四邊に響き

渡つた。

時計が一つ鳴つた。

夜は寂として居る。老いた蛙の鳴聲が絶えてはまた續く。四疊半から秀雄の高い屏がする。少時すると病人は安心したといふやうな長大息を吐いた。

二十六

其夜に限らず、病人は可怪なことを言ふやうになつた。それも熱の爲めの讒言とは違つて、眼をぱつちり開いて看護をするものゝ顔をまじく見ながら言ふ。ではもう人の見さかひがつかなくなつたのかと思へばさうでもない。銑之助や秀雄を捉へているく正氣な話もした。

何處かに行くといふことをよく言つた。それから朱の衣を着けた和尚様が一晝夜に少くとも三度位は迎へに来た。其時は丸で意識を失つ

て了つて坊主が来た！坊主が来た！と叫ぶ。据ゑた眼がいかにも恐ろしうで細い瘦せた手を重さうに舉げては胸の邊を頻りに掻き拂らはうとする。口をもぐくさせて何か言はうとしても其時は満足に言葉が出ぬらしい。他界の神秘が人々の胸の底を衝いた。

又かういふ話があつた。昨夜お駒が看病して居た。勢れてついうとうとする凄しい音がした。確かに誰か来て戸を叩いたに相違ない。で、はいと返事して玄關の兩戸を開けて見たが誰も居ない。門まで出て見たが矢張誰も居ない。不圖氣が附いて急に戦慄が出て慌て、戸内に入つた。「實にあの時は怖かつたですよ。何うしやうかと思つた位でしたよ。だから……急いで秀雄さんに起きて戴いたんですがね……」とお駒が話した。

近い田舎から出て来た義妹に當る老婦も同じやうなことを語つた。此頃毎晩胸騒ぎがする。不思議な夢を見る。病人が重いのではないか

しらんと苦勞にして居ると一昨夜確かに姉さんが来た。それは夢ではない。まだ宵の口で火鉢の前に坐つて居ると姉さんが莞爾と笑つて入つて来た。はて不思議だ。あんな病人が歩いて来られる譯が無いと思つたらもう影も形も消えて無かつた。御暇乞に来たんだと思つたから今日は何事をも措いて出て来たとのことである。かういふ話が幾つとなく人々の口の上つた。

病人は依然として腹が痛むのであるがもう押して貰はうともしなかつた。押しませうかと言ふと手を振つて見せる。そして小聲で、「押すと却つて痛い獨りで我慢する」といふ。

お梅は夜伽を恐れた。と謂ふのは二三日前の夜にお桂に頼まれて少時の間一人で起きて居ると病人が怖い眼をした。身體の具合で神経が昂ぶつて居る身にはそれが怖くつて怖くつて仕方が無かつた。それから頼んで成べく夜伽を許して貰うやうにした。主人もお梅は妊娠し

て居るから餘り無理を爲ないやうにと注意して呉れた。
 お梅は晝間病人の傍に居ることが多かつた。病人はお梅の顔をじつと長く見詰て居ることがある。他の人はさうで無いのに何故に自分ばかりかう注意されるのだらうとお梅は時々無氣味に思ふ位である。殊に其夜伽の時の眼を思ひ出すと、戦慄が出るほどに氣味が悪い。其身が懐妊してから病人の調子が著しく變つたことが常にそれとなく若い細君の心を惱まして居るのである。

久留米の紺緋の單衣に赤い帯揚をして、大きな丸鬘に結つた肥つた若しい姿は、瘦せ果てて骨と皮とばかりになつた垂死の姿と相對して坐つた。

二十七

かういふ状態で猶幾日か経過した。

午後三時過ぎ、秀雄は晝寝から起きて、裏の家に行く。縁側で少時仲兄と話して居たが、不圖立つて島に入つた。

玉蜀黍の熟したのを取らうとするのを銚之助は見て、
 「いかんよ、玉蜀黍を取つちや—」
 「何故？」と秀雄は振返つて、「好いさ、好いさ、此間から覗ひをつけて置いたんだ」
 ギイと折る音がする。
 それを手にして、島から出て来て、皮を剥いて、「ほら……この通りに立派に實が熟つて居る」
 「困るナア、お梅が大事にして居るんだよ」
 「嫂さんが……。構ふもんか、己が取つて食つたつて言へば好いちやないか」
 秀雄はすん／＼島に入つて、暫くがさ／＼と熟したのを採して居たが、

やがて毛の黒くなつたのを五六本抱えて出て来た。
銑之助はハンモックに身を横へたまゝ黙つて見て居ると秀雄は自分で臺所へ出懸けて行つてガタビシとけたまひしい音をさせて七輪を前の縁側に持出して火種を火鉢からさがして消炭と炭とを上に乗せて團扇でばた／＼煽ぐ。

「銑ちゃん手傳つても好いぢやないか」
銑之助は笑つて居る。

「焼けても遣らんよ」

「けしからんことをいふ人の家の玉黍蜀を無断で取つて人の家の炭で焼いて遣らんよも無いもんだ」

「遣らん遣らん」

と言つてばた／＼煽ぐ。

火がやがて活々と起る。秀雄は取つて来た玉黍蜀の皮を剥いて三本

ほど火の上に乗せる。

其處にお米が女の兒を抱いてだらし無い格好をして遣つて来た。

「何だね、ア、秀。玉黍蜀なんぞ焼いてるのかい」

と笑ひながら言葉を懸ける。母が病氣なのに暢氣なといふ調子である。

三人の胸には同時に幼い時のことが浮んだ。夏の日學校から歸る時分には母親とこの姉とが姉は其頃もう學校を卒業して居た二人の弟の爲めに玉黍蜀を焼いて待つて居て呉れた。姉が島に行つて玉黍蜀を折る音がギ／＼と聞える。母親は賃仕事に坐つて前には大きい銀杏の裁物板が据ゑられてあつた。姉弟は言合せたやうに其時分のことと今のこととをひきくらべた。かうして人は生れ人は死し世は移り行くのである。

お米は田舎に置いて来た子供等をも思ひ出した。

秀雄は焼けたのを二本取つて、

「暑い暑い。火の傍はたまらん。姉さん焼いてお呉れ」

ともう用が無いといふ風で立上る。

「ひどいね、まア秀は」とお米は笑ひながらいふ。

「だッて、かういふことは女の役目だ。その代り一本遣るよ」

「己にはよこさんのか」

と銑之助はハンモックの上からいふ。

「お前がまだ一本持つてるぢやないか、それを寄越せ！」と半ば身を起して取りにかゝる。秀雄は笑ひながら逃げて廻つた。大人とは思へぬほどの無邪氣である。

火の上に載せてあるのが焦げるので、お米は止むを得ず子供を縁側に這はせて七輪の前に立膝して蹲んだ。

やがて残らず焼ける。

玉蜀黍を食ひながら幼稚い頃の物語が始つた。一粒づつ玉蜀黍の實を爪で取つて明地を拵へて、此處が三疊六疊、すつと奥が便所！など、物真似をして食つたものである。それに同胞の一人が吃度後まで残して置いて態と見せびらかす悪い癖があつたので、最後はいつも奪ひ合やら喧嘩やらに終つた。「もう忘れても焼いて遣りやしないから覚えて居ろ」と母親がよく叱つた。

その頃を誰も皆思つた。お米は自分の教つた小學校の先生から結婚を申込まれたことを思ひ出した。其先生は今も田舎の近郷の學校の校長をして居る。時々町で邂逅することがある。銑之助も秀雄も其先生を知つて居るので、其先生の話から段々田舎の話に移つた。

銑之助は銑之助時代、秀雄は秀雄時代の友達やら娘やらのことをお米に訊いた。故郷に残つた友達は多くは小學校の教師になつて、其頃の娘

達はそれぐ子持になつて居る。銚之助のラブした丸顔の町娘はもう三番目の女の兒を抱いて、此間も街頭を歩いて居たとお米は語つた。秀雄は十二の時田舎を去つたので、まださうした戀の経験はない。渠は釣のことや沼のことや竹馬の友のことを飽かず訊く。

「お前が士官になつたのが、そりや田舎では評判だよ」とお米は言つた。

「一度國に行つて見たいね」

錦を飾り度いといふ氣が秀雄の胸にあつた。銚之助は此頃「ふる郷」といふ小説を書きかけて居た。故郷は渠の爲めには失戀の故郷であり失意の故郷であり灰色の故郷であつた。かれは飄零落魄した男が一衣を人知れず故郷に過すといふことに筆を着けたが、其男は無論銚之助自身であつた。銚色の浅茅沼泥塗れの小舟藻や葦菜や蓮の繁茂、それが目の細かい網のやうに其記憶に織込まれる。

衣袋

我が故郷の風景

故郷の追憶にはいつも母が伴ふ。士族屋敷の小路裏の島湯歸りの田畝道沼の畔の朴の樹——姉弟はこれ等の縮圖の中に母親のなつかしい顔を見た。

「母様今少し生かして置きたいねえ！」

としんみりした調子でお米は言つた。けれど母親はもう現在の人としてよりは過去の人として子等の頭腦に映つて居たのである。

七輪に懸けた鐵瓶が蒸立つたので、お米は茶を淹れて弟共に出すと、

「茶はあついな銚ちやん、己がサイホンを沓らうか」

「沓れ沓れ」

で姉は子供を秀雄に托して使に行く。暫くして喜久井町の通の水屋の婢が氷の打解いたのとサイホンの筒とを岡持に入れて持つて来る。風通しの好い涼しい松原の縁の漲つた一間に姉弟は楽しさうに氷を啜つた。

かうして居る間にも秀雄は娘のことを思つて居た。

銚之助は『ふる郷』の話をして聞かせた。秀雄は聞終つて、

『それで一冊書いて餘程原稿料になるのかね？』

『金は僅少だ』

『でも書いて呉れつて書肆から頼みには来るんだらう？』

『それは来る』

『うむ』

銚之助の答は稍曖昧して居た。

『それなら好いさ……。軍人なんざ本當に詰らん。朝から晩まで埃を浴びて大きな聲で怒鳴つて、そして時々は大目玉を食ふんだから』

『東京には出て来られないのか』

『さうさなア……。其中には出て来られるだらうけれど、今年は駄目だ』

『田舎にぐづくして居ると、後れて了ふせ』

『大丈夫だよ』

『大學には入らんのか？』

『入る積りで勉強してるけれど……駄目だよ、僕には』

『何故？』

『参謀なぞ柄にない』

『始ッからさう捨て、了はなくつても好いちやないか』

『野戦隊の方が面白いからナ』

『野戦隊でも旅團長位になれや面白いけれど……』

『無論なるさ』

と秀雄は笑つた。

秀雄には銚之助が解らなかつた。お互に交情は好い。やさしい人だ

と秀雄は思つて居る。けれど何うもその文學的の處が腑に落ちない。何ぞといふとすぐ悲しい方ばかり物事を定めたがる。平凡なことを罪惡だとか何だとか言つて大騒ぎをずる。何ういふ譯だか解らない。長兄の形式的の辭令にも餘り感心はしないが仲兄のやうに神經過敏でも困ると常に思つた。

「人間も死なうたつて中々死ねないもんだねえ」と秀雄が突然いふ。「何故」

「だつて母様でも死ぬ死ぬと醫師から宣告されて未だに生きてるぢやないか」

「あんな酷いことを……男は暢氣だねえ」とお米が呆れる。

「だつて左様ぢやないか。何うせ死ぬんなら早く死んだ方が好い。僕などは卒中か何かで、ほつくり死んで了ひたいよ……」と秀雄は平氣で、

「それにしても、よく保つもんだねえ。丸で一週間から食ふものも食はずに、あゝして居るんだがなア」

「本當だ」

銑之助も言葉を合せた。

「姉さんも國の方を何時まで投つて置いて好いのかえ。何とか消息があつたかえ」

「好いたつて悪いたつて、かうなつて親の死目に逢はないで歸れやしないやねえ。秀は暢氣なことばかり言つてるよ、一體情が薄いね、お前は……」秀雄は笑つて居る。

けれど銑之助は秀雄のかうした言葉をも別に不思議とも暢氣とも思はなかつた。まして情が薄いなど、夢にも……。秀雄が心から母親を思つて居ることは銑之助はよく知つて居る。自分よりも數等情が篤いことも知つて居る。銑之助は涙を流したり悲しい言葉を言つたりする。

けれどそれは情に篤い爲めではない。昨夜もハンモックの上で五日頃の月を見て、此月のいつ頃に母の死に逢ふことかと烈しく泣いた。けれどそれは母親を悲むといふよりは寧ろ自己の感情に泣いたのだ。其證據には、其處に若い細君が歸つて來たら、其涙は忽ち乾いて了つたではないか。其の柔かい手を握つたではないか。

銑之助は自からかう罵つた。

二十八

月が段々明るくなつて、今日はもう十日だといふ。街の賑はひ、水店の繁昌、鉢植の草花、神樂坂は毎夜毘沙門の緑日のやうに雑踏するとの噂。山手の奥からも白地の浴衣に薄化粧の夫婦連が幾組となく出懸けて行く。

病人はまだ生きて居た。

平生後生を願はなかつたからといふ聲が彼方此方に聞えた。だから言はぬことではない、私は御寺參をあれほど勧めたのにと親戚の法華かたまりの老婦が得意さうに言つた。お駒は人知れず叔母の爲めに板町のお釋迦様に跣足參をして、何うせ治らぬものなら一刻も早く御引取下さるやうにと願を懸けた。

主人は月の始めから暑中休暇で家に居た。小まめに病人の世話をやら家事やらを手傳つて、暇には縁日で買つた草花などをいぢつて居る。男の兒の爲めに、小さな池を庭に掘つて、金魚を三四匹放つて遣ると、英男は大喜びで、前の田から給やら目高やらを自分ですくつて來た。いつもは蜻蛉捕蟬捕に夢中で、晝飯も碌々食はずに、遠くまで彷徨き歩く。縁側の隅の紙屑籠には、ぎんやらちやめやらやんまやら蟬やらが一杯入れられてガサ／＼騒ぐ。

「此子はまア父様に似たと見えて、こんなになんまを捕つて來て……」

とお駒がいふ。

兄弟の中で主人が一番頑健であつたといふ。蜻蛉や蟬を澤山取つて来ては縁側に籠に伏せて置くので祖父が喧しいと言つて仕方が無かつた。それに悪戯と言つたら界限でも名代で近所の元頭を打つて怒鳴り込まれたことなどもあつた相だ。『あの悪戯子がこんな立派な旦那さんにならうとは思はなかつた』などと其頃を知つて居るお駒は笑ひながら常に昔を語る。

『秀ちゃん知らないがね銚ちゃんは成人しかつたよ。此子はおすばりで家に引込でばかり居て滅多に戸外に遊びになど出なかつたからねえ。それに此兒が生れたばかりの時叔母さんがね、よく實家に抱いて連れて来てね、御飯の時はお駒鳥渡代つて小兒を抱いて遊んで來なつて、祖母さんに吩咐けられて、戸外に行くのさ。すると此子はそれア泣蟲で火のつくやうに泣いて泣いて、いくらだましても泣止まない。除り泣くも』

んだから、お駒落しでも爲たんぢやないかつて、祖母さんによ、叱られたものさね！』

『其時幾つたッたえ、お駒さんは』

『十五か六で、よく機を織つて居たアね』

『秀も中々悪戯だつたよ』

と傍からお米が言つた。

『さうかねえ、秀ちゃんも悪戯だつたかねえ。私は叔母さんが叔父さんと東京に出てからは、足利に嫁に行つて了つて知らないけれどね……それにつけても、かうしてまア、皆な大きく立派になつて、揃つて看病するとは、叔母様も仕合せさね』

此お駒が老母の若い時代のとも話した。實家の祖母の話では、老母は嫁に行つた當座、舅姑が難かしいので、幾度も實家に歸つて來た。それをいつもすかしたりなだめたりして歸して遣る。處がある時、もう今日こ

そは死んでも歸らぬといふ。段々様子を聞いて見ると、餘程辛いらしい。けれど昔はさう容易く離縁は出来なから、今一度我慢して辛棒して呉れ！ッて泣いて祖母が慰めたさうだ。母は泣きながら夕暮の田圃道を一人さびしく歸つて行つたが、其時から居る氣になつたと見えて、間もなく亡くなつた總領の姉が腹に出来たとの話である。母がある時酒を飲んで酔つて、『お前の父様などは氣難くつて来たはなかつた。もつと好い人はいくらもあつた』と言つたことを銚之助は思ひ出した。永久の人生に連珠の如く輝くのは若い戀である。

夕暮になると前の田圃に蜻蛉が蚊を食ひに来るので、近所の子供が鞘竿を携へて多く集つた。銚之助と秀雄は夕飯後の運動に男の兒と一緒に事ありげに手招した。母様の容體が變だ！

行つて見ると上目をして一ところを凝と見詰めた眼は凄くうるんで

居た。仰向に白髪頭を栞枕に載せて、両手を胸の邊に合せて不整になつた呼吸をする度に、咽喉の處が微かに動く。をり／＼聲を出して何か言ふが、それがもう解らぬほどに舌が縛れた。

『あらもう舌が廻らないのだよ』とお米は慌て、『母様母様』と聲を高くと呼んで見る。

病人は眼を聲のする方に向けた。まだ意識があるといふのが解る。時々顔に皺を寄せる。

『まだ痛むと見えるね』

三時頃から少し容體が變つて来たのである。午まではいつもの状態別にこれと謂つた微候も見えなかつたが、不圖傍に居た主人が氣が付くと、舌といひ眼といひ皮膚の色といひ何うも唯ならぬ氣勢がそれとなく見えた。折よく醫師が来た。形のごとく胸に聴診器を當て、眼縁をめぐつて見て居たが、いつものやうに病人に聞かると、のを憚りもせず、『う

ん、これはいかん。もういけません』と平氣である。醫師は病人が既に
聽覺視覺を失ひつゝあるのを知つたのだ。

「御大事になさい、もしもの事があれば何時でも起して好いから。家の
耳門の呼鈴を知つて居るかね、あれを押しさへすると夜中でも通じる」
かういつて忽惶に去つた。注射などはもうする必要が無かつた。
子等は兎に角其周圍に環を爲して集まつた。誰の視線も皆な瘦せ衰
へた病人の上に落ちた。

病人は微かな呼吸を刻むやうにする。そして一分の中に一度位ハア
と深く大きな呼吸を交へた。其時に半開いて締のなくなつた願がが
くりと外れさうになる。右の手を辛うじて持上げて、胸の邊を搔拂ふや
うな真似をしたが、其度に微かな無氣味な形容の出來ない唸聲を立てた。
誰も皆沈黙した。障子に移つた夕焼の反照も次第に消えた。
やがて日が暮れたので、お桂が先づ立つて茶の間に洋燈を點けた。そ

して病人の枕元に行燈を持つて行くと、お駒とお米は立つて蚊帳を釣
りに懸る。

縁側に並んで立つた秀雄と銚之助。

「いよく駄目だね」

「今夜はあぶない」

「今日は幾日だつたね？」

「十五日」

「さうか八月の十五日」

と秀雄は何事か思ひ集るといふ風でかう繰返した。

舊曆は七月十二日、銀盤を磨いたやうな月は既に水のごとき光を庭に
落して居た。樹の影草の影が黒く地上に横つて、垣には虫が早鳴き始
めた。

其處に男の兒が兩手の指の間に隙間なく蜻蛉を挟んで歸つて來て、

「叔父さん、これ！」

と得意さうに見せる。

「一人で捕つたのか」

秀雄がかう訊くと、

「一人とも、まだ澤山居るんだよ！」

と、跳足で上にあがれぬので、身体を延して籠を取つて、ガサ／＼と蜻蛉を其中に入れる。

「新ちやめが二疋に婆ちやめが三疋！」と嬉しさうに叫んだ。

「英ちやん、もう足洗つて寝るんですよ」

と其處にお駒が来て、バケツに水を汲んで足を洗つて遣る。

時計が入時を打つ頃には、其男の兒は茶の間の一隅に蚊帳を半分釣つ

て、小さい疋を立て、寝て居た。茶の間には紙笠の五分の洋燈が徒に明

るく點いて、一家の人は皆座敷の蚊帳の中に集つた。

蚊帳の中は薄暗くつて蒸暑かつた。それに物の腐る臭が人を壓して、

重苦しい呼吸の音が沈黙した一間に際立つて聞える。

行燈の微かな光は枕元の黒塗の盆薬瓶などから懸けて、蒼白い死人の

やうな顔を照した。周圍に集つた人々の顔も真面目で陰氣でそして暗

かつた。今までは主人が小さい水差を口に宛て、遣るとさも旨さうに

嚙下したものだ、今はもうそれも出来なくなつたのである。止むなく

筆に水をふくませて飲ませた。

時計が十二時を打つた。秀雄は久しく病人の足元に坐つて居たが、ソ

ツと蚊帳をまくつて裏の縁側に出た。眠くつて眠くつて仕方が無いの

であつた。で、茶の間を通つて縁側から下りて、井戸端に行く氣勢がした

が、續いて水を汲む音がして、頭を洗ふ音がざぶ／＼聞える。

月はもう餘程傾き懸けて居た。美しく晴れて居るので、樹と草の影が

いかに濃い。影と影とが暗く重り合つた處から少し離れて、梅の葉が

一つ一つ露に光つた。

物の思はるゝやうな夜であつた。

秀雄の黒い影は門の處に少時立つて居たが、やがて駒下駄の音をさせて縁側から茶の間に上つて、長火鉢の前に坐つて煙草を一服吸つた。眠むさうな顔を洋燈が斜に照した。不圖傍に姉のお米が見て居た八犬傳の最後の巻が一冊読み懸けたまゝ伏せてあるのを手に取つて無意味に頁をかへして見た。八犬士が八人の姫と籤を引くところである。幾度も讀んで知ては居るが、つい釣込まれて二三頁讀むと面白くなつて來た。けれど蚊がいかにも多い、大きな奴がこつそり來て裳の上から痛く刺して行く。

其處にお米が出て來た。矢張眠さうな顔だ。
『同じだらう』と秀雄が小聲で訊く。

お米は點頭いて見せる。蚤に責められて痒いと見えて體の彼方此方をボリ／＼掻いたが、急に立上つて前をはだけて、白い腰巻を洋燈に寄せ

て蚤をさがし始めた。また初めたナと秀雄は眉を擡めた。

銑之助も主人に續いて出て來た。やがて鹽煎餅が山のやうに盆に積まれたまゝ出される。秀雄は八犬傳を讀みながら三枚も四枚も食つた。主人が淹れた茶を姉弟は皆飲む。

今度は銑之助が縁側に出たが、『好い月だナア！』と言つて、すぐ庭に下りた。多感の銑之助は此落月の寂しさを無意味に見ることは出來なかつた。かれの悲哀は長く黒く曳いた物の影に細かに織込まれるやうな氣がした。

月は低くなつた。裏の水口の戸が今まともに其光を受けて居る。戸の上の壁の崩れも明かに眼に見える。土用を過ぎても刈込まぬ杉垣が不整に亂れた影を路に落して、虫の音が物哀れに聞える。母の最後の夜——かうした落月の物の影と洋燈と蟲の音とがかれの胸に鮮かに印せられて、一生忘れる時が無からうと思はれた。

銚之助が上つて来た時

「潮時といふことがあるもんだ相だ……」
と主人の言ふのが聞える。

「それから生れた時刻に人は死ぬものだと言ひますねえ叔母さんは何時頃生れたんでせう知つてる人はありませんか」とお駒が言ふ。
誰も知る者は無かつた。

月が落ちた。黎明の光が何處となく行渡つた。潮時も来てやがて過ぎた。

鳥が啼く。日が出る。車井戸を繰る音が其處此處に聞える。家々の引窓からは朝餉の烟が昇る。味噌をする音がする。新しい日毎の生活は始つた。けれど病人はまだ生きて居た。お駒は井戸端で、「まだ御引取下さいませんか」と朝水汲みに来た隣の細君に話した。

二十九

其日の午後四時主人は四疊半で古文書を取調べて居た。お米は玄關の三疊で女の兒に乳を呑ませながら眠つて了つたし、お駒は汚れたもの洗濯を爲て居るし、秀雄は裏の家の座敷が涼しいと言ふので午後から態々出懸けて行つて晝寝に耽るし、銚之助は暑い日盛を祖になつて一生懸命に原稿を書いて居るし、病人の傍にはお桂とお梅とが唯形式的に坐つて居るばかりであつたが急に様子が變になつたのでお桂は慌て、夫を呼んだ。

主人はすぐ来て見たがお梅に、

「早く銚と秀を呼んでお出で！」

お梅は慌て、顔色を變へて飛んで行く、主人は玄關のお米を揺り起す。お駒は濡れた手のまゝで縁側から上つて来る。静かなる夏の晝の

平和は忽ち破られた。

「貴郎、貴郎、大變！」

とお梅は庭から聲を立てゝ入る。

「何うした？」

「母様が變です！」

銑之助はすぐ立上つた。そのまゝ傍に仰向に寝て居る秀雄を揺つたが容易に目覺めない。うん／＼と返事を爲ながら、すぐまた眠つて了ふ。いろ／＼にして漸く起すと目を摩つて不平さうに、「何うしたんだ？」といふ。「何うしたんぢやない母様が……」と話すと、溢々ながら起き返るには起返つたが、まだすつかり眼が覺めないといふ様子。

それを漸く促し立てゝ、急いで下の家に驅付けると、お米が眼を赤くして今し筆で末期の水を含ませて居る處であつた。呼吸はまだ吐いて居た。深く刻むやうに時を置いて、半開いた瘦せ果てた願が其度毎に動い

た。見開いた眼は義眼のやうにばつちりして、手を遣つて見ても、もう眼はたきを爲なかつた。

「母様！」

と泣聲でお米が呼んで見たが、もう通じぬらしい。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」

お胸は一生懸命に唱名をして、頻りに口を筆で濡らしながら、「死ぬ時と謂ふものは、水が欲しいものだ相だから」とか何とか言つて、さも／＼情に堪へないやうに、「好い叔母様だつたに……よく物の解つた、伶俐な叔母様だつたに……」

涙が其頬を傳つた。

呼吸が絶え／＼になつたと同時に、ぐつと痰が咽喉にこみ上げて来て、二度三度顔をしゃくつたと思ふと、それきり息は絶えた。

手の脈を取つて居た主人も、今が最後であることを知つた。

最後！ 死！ と思ふと、悲哀の情が溢るゝやうに人々の胸に漲つた。死は總ての事情を忘れしめ、總ての汚れた思を消淨ならしめる。死に面しては、誰も嚴かな悲哀と同情とに撲れぬものはあるまい。

『南無阿彌陀佛』とお駒は猶唱名の聲を止めずに、『銚ちゃんも秀ちゃんも最後の水を含ませて御遣りなさい。親子の縁もこれが限りです』

低頭勝にして居た銚之助の眼からは涙が霞のやうにはろ／＼こぼれた。秀雄は少し離れて覗き加減に死者の顔を見て居たが、この悲しい言葉やうに平手で無造作に面を掩つた。下唇を噛んで、つとめて押へて居る様子であるが、胸には波を打つて悲哀が押し寄せて来ると覺しく色の淺黒い無邪氣な大きい涙を涙が流れた。主人もお梅もお桂も皆泣いた。醫師は来たが、鳥渡脈を取つたばかり、もう胸を明けて見やうともしな

かつた。極めて平氣で、『遂々亡くなつたか。お婆さん幾つちやナ？』
『五十八でした』
と主人が答へる。

『五十八ではまだ惜しかつたぢやな。八十まで生きる人もあるんだから……。それにかう子息さんが皆な成長くなつて立派になつたのだから猶残念だ』

『今一二年生かして置きたう御座いました』と言つた主人の聲は曇つた。

『まア仕方が無い。幼い子を三人も置いて死んで行く母親もあるんだ。……それに手當も充分にしたんだし、これも壽命とあつて見れば止むを得んぢやて……。』鞆を携へて立上つて、『それぢや診断書はすぐ書いて置くから取りに寄越しなさい！』
さつさと暇を告げて行く。

子等はまた其傍を離れがてに黙つて其周囲を取巻いて居た。一しきり泣いた烈しい壓迫は夏の空の低氣壓のやうに忽ちにして過ぎ去つたが、今度は緩るい静かな深い追懐に伴つた悲哀が人々の胸を蔽つて互ひに思出したいろくの悲しい記憶を一つ一つ語り合つては誰も涙に曇る眼を拭つた。暑い夕日は島の緑の玉蜀黍の赤い葉と丈の高い杉垣とを越して、まともに此八疊に照り渡つた。

其處に探しに行つたお貞が秀男を伴れて歸つて來た。

「坊やは何處に行つて居たんだねえ、まあ」とお駒は逸早く立つて行つて、「お婆ちやんが——お婆ちやんが死んだかね、もう」

とまたも涙に聲を曇らせながら、そのまゝ傍に坐らせて、

「そら、御覽、お婆ちやんがもう死んで了つたよ」

一座は又濕つた。

男の兒は困つたといふ風で眼を開いたまゝ死んだ祖母の顔を怖々見

た。子供ながら臆ろげに死の何物たるを知つて居るので、涙こそ滴さぬが、黙つて悲しさに頭を低れた。お駒は水を含ませた筆を手渡しして、「もうお別だに……口をぬらして御上げなさいよ。祖母ちやんはもう死んだんだからね！」

男の兒は言ふがまゝに死んだ祖母の口を筆で濡した。

「本當にお祖母ちやんは坊やを可愛がつて居たのに……もう抱いて寝て呉れる人も無いねえ」お米は堪らなくなつたやうに聲を立て、泣いた。

少くとも三四十分は歎歎やら追懐やら悲しい繰言やらに過ぎた。けれどいつ迄かうして居る譯には行かなかつた。

お駒は先づ其屍の傍に寄つて、「眼を開けて居てはいけませんからね、お閉きなさいよ、南無阿彌陀佛——」と生きて居る人に物言ふごとく眼を閉ぢ口を閉ぢて遣て、

「あゝあゝ後生が好い、ほら好い顔に成つたやさしい顔になつた！」
甲斐々々しく後に廻つて汚ないものでもしや出て居はせぬかと調べ
て見た。「あゝ奇麗になつて居るよ、何も出て居やしない！」
「さうだらうともねえ、氣丈な母様だつたから」とお米はまた顔を掩つ
た。

お駒はふと氣が附いたらしく、「足や手は體の柔かい内に整然として
置かないと、あとで困るがねえ……」茶の間に行つた主人を呼懸けて、
「鏡さん、棺は何うするんですえ！ 寢棺ならかうして置いてもいいけれ
ど……」

「無論寢棺さ！」
と秀雄は聲高く言つた。

三十

呼吸を引取る前と引取つてからとは人々の頭腦が著しく變つた。
前には或ることの結果を急いで早く結末を見たいといふやうな空氣が
漲つて居たが、さて結末が到着して見ると、今度はそれとは異つた清い美
しい悲しい情が溢るゝばかりに流れ渡つたのである。

けれど一方では兎に角これで重荷をおろしたといふやうな氣がした。
誰れも皆な其前に新しい生活の開かれるのを見た。同胞の間の關係も、
親といふ連鎖が断られたので、全く獨立した自由と寂しさを感じた。

お駒とお米だけ先に立つて遺骸を薄縁の臥席の上に北向に臥かして、
長い間敷いて居た蒲團を裏の縁側の夕日に干すやら、小形の六枚屏風を
逆に立て廻すやら、有合せの晒木綿を取敢へず机に懸けて、其上に香爐を
据ゑるやら、線香を立てるやら、裏の野からお貞が折つて來た花を供へる
やら、いろ／＼其仕末に忙しがつて居る間に主人と銃之助と秀雄は、先
第一に報知すべき親戚知己を選んだ。同時に主人の胸には葬式の期

のどが先づつかへた。銚之助は兄の兼ねての性質を知つて居るので面からは切つて出さぬが内々其れと句はして自分も萬一の時と思つ貯めて置いた金が二十圓あるから使つて呉れと申し出ると、『まア大恩になつた母の葬式だから、成だけ立派にしたいからナ、少しは助けて貰ひたい！』

と主人が言つた。

「兄様は大變だけど仕方がない。僕等も何うかしたいけれど、貧乏少尉で、金なんかありやせんからね。仕方が無い借るさ！」

と秀雄は暢氣だ。

で秀雄は近い親類——殊に是非來て手傳つて貰はなければならぬ人に電報を打ちに神樂坂の郵便局に出懸けて行く。主人は色の褪めた紺の背廣を着て金の工面に神田まで行く爲めの車を呼ぶ。銚之助は一人殘つて通知の端書を書くべく四疊半に入つた。

死の報知が傳つたので、近所の人々が先第一に悔みを言ひに來る。前の夫婦者右隣の二階屋の細君軍人の細君、それが一人一人遣つて來ては屏風の蔭に置かれてある遺骸の顔の上の手中を取つて、線香を二三本上げて、同じやうな悔みの言葉を述べて歸つて行く。「まア、まア、こんなになんすつてね、長い御病氣でしたからねえ」と隣の老婆が例の調子で言つた。

一家が何となくそはくして居た。別にこれと謂つてまだ用はないが、何だか非常に用があるやうな氣がされる。お梅は何をして好いか解らぬので、彼方に行つて立つたり此方に行つて立つたりして居た。そして思ひ出したやうに、をりく屏風の蔭に行つて線香を上げる。お米は母のことから引續いて自分の夫のこと、家のことを思ひ出して絶えず眼を赤くして居た。銚之助が端書を書いて居る前の庭には、百日紅が鮮やかに夕日に照つた。

郵便局は空いて居た。秀雄は電報を十通打つた。自分の中隊長にも知らせた。遣つたが最後に今一通打つた。無論それは娘の家である。不圖もう一週間経てば歸れると思つた。で神樂坂から矢來の長い暑い路を母のことやら娘のことやらを思ひ續げに歸つて來ると家ではお駒とお米とが茶の間に坐つて頻りに白い葬衣を縫つて居た。夕暮近く人が次第に集つて來た。

深川に居る叔母も來た。退職軍人の義兄も來た。死んだ母の甥で本所で櫛職人をして居る男も來た。お駒の姉で天理教の信者だといふ五十恰好の中老婦お桂の實家の長兄お梅の實家の仲兄幾年越し往來したことのない祖父の甥に當るといふ元頭の禰宜狭い家はいと狭く挨拶やら秋戯やら追懐談やら煙草と線香との煙は暑苦しく薄暮の一家を籠めた。

四疊半には同胞の他に重立つた親類が寄集つて頻りに葬式の準備を

相談して居る。主人は二三軒奔走して漸く百圓足らずの金を借りて來たが、其中の一人には維新後の別離の時藩侯から紀念として抽籤で頂戴した雪舟の羅漢の一幅を抵當にした。此一幅は吉田の家の寶物同様にして置いたもので祖父の生きて居る頃は長持の底深く珍製して一年に二度床の間に懸けて孫共に見せるのが例であつた。そして祖父はこれを吉田家の生命のやうに孫共に説明かせてこれを人手に渡すやうなことがあつてはもう吉田家もお了ひだと口癖のやうに言つて聞かせた。銚之助は祖父の言葉を思出して自分等の腑甲斐の無いのを悔ますには居られなかつた。

父が戦死して靖國神社に合祀されて居るので母の葬儀も神道で擧げること評議一決した。貧乏はしてるが成るべく立派にといふ主人の意見で近所にいくらもあるのを擱いて鎌倉河岸の大きい葬儀社に一切を托して日比谷の大神宮から神官を呼ぶことにした。元頭の禰宜が萬事

馴れて居るといふ處から、其方の世話は總て其人がする事になつた。生花が三對造花が二對、神が一對、御簾の二重に下がる棺臺を選んで、銘旗をも樹てる筈だと話すと、『それなら立派だ！高等官の葬式でもそれまでだ』と退職軍人の義兄は言つた。今夜湯灌をして成たけ棺に納めて了ひたいので、元頭の禰宜はすぐ大神宮から葬儀社へと出懸けた。逆屏風の中には新しい花が更に多く供へられた。西洋蠟燭が美しく點つて飯を山のやうに椀に盛つた上に箸が二本差されてあつて、枕團子が其傍に置かれてある。神道ではさういふことはせぬものだといふ説もあつたが、神官の來ぬ中は、矢張佛様なのだからといふ女連の説に従つたのである。屏風の外には、人々が皆な思ひ思ひに座を占めて、故人の話やら雑談やらに耽つて居た。

茶の間から勝手に懸けては、非常なる大混雑、火鉢には鐵瓶の湯が煮え立つて白い湯氣を立て、居るし、竈の下には火が赤い舌を出して居るし、

流元では水を使ふ音がざぶ／＼と聞える。女連が一生懸命に夕飯の準備をして居るさまが畫のやうに……。

やがて夕飯が出る。洋燈が點く。晝の暑さは夕暮から出た涼しい風で少し凌ぎよくなつたが、蚊が多いので、家の中にじつとして居るのは容易でない。十三日の月は已に美しい光を放ち始めて、一點の雲も無く晴れた空に星が疎らに點綴せられた。

三十一

日が暮れてから一時間経つた。お梅は留守番に頼んで置いたお貞と代つて夕飯を食はせやうと思つて裏の家へと歸つて行つた。其時銚之助は鮮かな月の光を浴びて門の處に涼んで居たが、今行つたと思つたお梅が少時すると戻つて来て、『貴郎』と手招きをする。

『何んだえ』と言つて行かずに居ると、

『貴郎鳥渡話すことがありますから……』

何かと聞くと、お梅は聲を低く、『今ね門の處まで行くと家の垣の中で
話聲がするんですの。可怪しいと思つて立留つて聞きますとね。お貞
さんが向ふの書生さんと……』と言懸けて笑ふ。

『何うしたんだ？』

何も言はずに益々笑ふ。

『可怪いちやないか』

『だつて話せやしませんわね。……だから私は、ソツと引返して來ました
の』

『困るぢやないか……そんなことになつちや前からそんなことがあつ
たのかねえ？』

『そんなことは知りませんが、ちよいちよい話などをして居るのは見

たことがありました。

『困るねえ』

『お駒さんに話して上る方が好い……』

『まア、それより行つて見やう』

二人は行つて見た。もう無論其男が居やう筈が無い。お貞は茶の間
の洋燈を後に背を丸くして坐つて居たが、疵持つ足の唯そはくと落附
かぬ様子、先程の足音を鳥渡耳に入れたので、勸附かれたかといふ疑が其
胸にあつた。縁側から上つて行つた銚之助は、黙つて厭な眼色をして小
柄な桃割に結つた娘を上から見下したが、お梅は打解けて、

『御腹が空いたでせう。もつと早く代るつもりでしたけれど忙しいも
んだから』

『ちつとも御腹なんか空きやしませんよ』

『でも退屈でしたらう？』

『いゝえ』

顔の赧くなつたのが洋燈のかけでも解つた。

忽々にして逃げるやうにお貞は縁側から歸つて行く。

若夫婦は顔を見合せて笑つた。二人は代る／＼看病に忙がしく、久し

くかうして長火鉢に向つて坐つたことはなかつた。それに弟や姉が絶

えず遣つて来るので人目の關が多かつた。勿論二人の間はもう新婚當

座のやうな甘い歡樂は無いが、それでも時には手の一つも握つて見たく

ないことは無かつた。二人は今一度顔を見合せて笑つた。お梅は派手

な中形の浴衣を着て九箇の鬢のほつれを二筋三筋色白の肥つた頬に亂

して居た。

八疊の座敷は暗く洋燈は徒らに茶の間を照した。

少時して銚之助は月の明かな庭を彼方此方と歩いた。例の感情的神

經で死んだ母と子等の關係との頼むに足らざるを思つて、何うしてかう

人間は汚ないものであるかと考へた。こんなことは當り前のことであ

る何でも無いことである。と思ひ返しても渠は矢張胸苦しかつた。

下の家に行かうとして門を出た。實に好い月夜だ。母のことを考へ

るに、これほど好い紀念になる夜はあるまい。品物の葉にはもう夜露

が置いて、虫の聲が濃にすだく。銚之助は思はず眞想に耽つて門から少

し行つた處の右の小徑に秀雄が立つて居るのを知らずに過ぎた。秀雄

は久しい前から門の傍に立つて居た。其處からは垣を越して銚之助の

家の中が分明と見えるのである。

仲兄を遣り過して後から口笛を吹く。銚之助は氣が附いて振返つた。

『誰だお前か』

『好い月夜だねえ』

『先程から此處に居るのか』

『いゝや』

『もう棺が来たかえ？』

『いゝやまだ……』と言つたが、『田舎の姉と嫂さんと喧嘩ばかりして居て仕方がありやしない』

『何か遣つたのか』

『ナアに言合はしはしないがねえ何ぞと言ふと二人ともすぐぶつぶと怒つて變つてこで、外聞が悪くつて仕方がありやしない』

『困るねえ』

『何うしてあゝだらう？』

『氣が立つて居るもんだから、お互に小さなことに角を立てるんだ。』

三十二

通夜は賑かであつた。神官が来て誄辭を讀んで二時間ほど居て歸つた。白木の位牌には何々の命といふ長い改名が新しく書かれた。蠟燭

と線香の煙の間に遺骸の長く横つたのが見えて三種づつを選んだ山の物海の物が三寶に載せて靈前に供へられた。

人々は皆な思ひ思ひの場所に座を占めて思ひ思ひの談話に耽つて居た。老人は御國替時分のことを語つた。軍人の義兄は父親の戦死した頃のことを語つた。其時この佛が氣丈であつたことが繰返された。櫛職人は若い放蕩時代に櫛を行商に日光の山奥を彷彿したことを、彌宜は館林に居る頃祖父によく小言を言はれて上目で睨められるのが此上なく怖かつたといふことを話した。若い者はまた若い同士で秀雄を中心にした一群は士官學校の試験の話、數學の話、若い士官の話、演習の話などを熱心に聞いて居るし、銑之助を中心にした一群は紅葉露伴の小説から紀行文の話、名所古蹟の話、山水の話など殆ど其の盡くる所を知らなかつた。滑稽の話も出ると見えて、せり／＼聲高く笑ふものもあつた。主人の伯父に當る老人が狐に化された話をした。化されると知りつ

つ化されて行く心外さを手真似をして話した時には人々皆な笑つた。狐の話から幽霊の話が出て老人組の方も中々賑かになつた。

『賑やかな御通夜で、佛様もさぞ喜んで居らつしやるだらうねえ！』とお駒の姉の天理教が言つた。

玄關の前では月が檜の樹に懸つて黒い影をつくつて居た。其蔭にお駒とお貞が立つて居た。銑之助はお駒にお貞のことを話したので、それで娘は母親からしたたか油を絞られて居るのである。娘の獻けものを母親は頻りに小突き廻して糺問した。其處に棺が來た。

取敢へず縁側に置いた。五分板の立派な寝棺である。棺を巻める聲が彼方此方からする。普通の棺だと足を折つたり首を曲げたり窮屈で厭なものだが、寝棺ではその心配が無くつて好いと言ふものもあつた。

第一に棺に納めたいと言ふので、肉身のものが寄集つて湯灌をすることにした。湯はもう以前から沸いて居た。先づ雨戸を半分閉てる。茶

の間と座敷との襖を仕切つて、他の人々には茶の間の方に一先集つて置つて、屏風と遺骸とを一隅に寄せて、中央の疊を三枚揚げた。

大盥に湯が波々と汲まれる。湯灌をする連中は古い單衣に着かへて、細の帯を緊めて、其盥の周圍に立つた。お駒とお米がそのまゝ遺骸の衣裳を脱がせたが、『まア此様になつてねえ！』とお米が得堪えずまた泣き出すのを、主人が手傳つて、盥の處に運んで來ると、櫛職人はかういふ世話はよく爲つて居るといふ風で、甲斐々々しく手やら足やらをさぶさぶと洗つて遣る。『綺麗に御なんなさいよ、ねえ、叔母さん！』とお駒は顔を洗つた。

死人はぐたりと手を垂れて首を曲げて眼を閉いで居る。それを薄暗い洋燈の光が靡る氣に照して、氣味悪く死の影を四邊に廣げた。肉身のものは少しも洗つて遣るものだと、言ふので皆な手やら足やら胸やらを洗ふ。南無阿彌陀佛の唱名が處々に起る。秀雄は無造作に手拭で顔

を拭く。銚之助は見るに忍びないやうな暗い顔をしてじつと立つて、このさまを見て居たが、最後に思切つて足を洗つた。死の冷かさが總身に傳つてギョツとした。

で棺の中に納める。薄い蒲團を一枚敷いて、葬衣を着せて、白い脚絆に白い甲がけ胸には頭陀袋を懸けて六道銭を入れた。佛式でないからとの注意がまたあつたが、女連はそんなことに頓着しなかつた。杖も入れた。草履も入れた。遺骸の周囲を埋めた樹の枯葉の香が一室に漲り渡つた。

三十三

焼香の順序に就いて、お米とお桂の間に暗闘があつた。葬式に列する女連の衣服に就ても紛紜が起つた。紋附を持つて居るものは遠い血統でも行列に加はり度いし持たぬものは衣裳を見せびらかす爲に行くの

ならやめて貰ひたいといふ腹がある。お米とお駒とは止むなく損料で紋附を借りた。

銘旗墓標の揮毫、青山墓地の準備、萬般のことはやがて皆整つた。更に一夜を賑かな通夜に過して、出棺は午後一時、午砲の鳴る頃には、家内は戦場のやうに混雑に混雑を重ねて、じつとして坐つて居るものは一人もなかつた。

主人と銚之助は神主の衣冠を着けて葬式に従ふことになつた。秀雄は退職軍人の意見で軍服を着た。四疊半で銚之助が其衣裳を着て居ると、秀雄が入つて来て、

「銚ちゃんよく似合ふせ！」

と笑ふ。

銚之助の其姿は實際可笑かつた。衣冠を冠ると面變りがして濟まして坐つて居るのを見ると、誰も噴飯したくなる。出棺前の誄辭を神官が

讀む間秀雄は隣に坐つたお梅の膝をつゝいて頻りに可笑がるので、お梅は笑ふには笑はれず困つて居た。

長い誅辭が濟むと、焼香が始まる。それも濟むと、今度は愈々最後のお別れ！親しい人の限りは棺の周圍に集つた。棺の蓋を取ると、其瘦せ果てた醜い顔！涙の雨はまた一しきり人々の袖を濕したが、やがて葬儀社の人足の監督が来て、冷かに棺の蓋をカンカンと打附ける。其音が狭い暗い家の隅々まで響き渡つた。

庭には會葬者が既に多く集つて居た。夏の暑い日、盛樹の蔭家の蔭に白い扇がばた／＼と動く。生花造花柳白衣の人足は門前に群を爲して、十數臺の俵は前の坂の半まで續いてゐる。近隣の人も思ひも懸けず葬式の立派なのに驚いて眼を睜つた。

棺は縁側から運ばれて棺臺の中に納められる。人足がすぐ擔ぐ。やがて庭樹の間を門前に出た。

主人から銚之助續いて少尉の新しい軍服を着けた秀雄、位牌は孫の男の兒が俵に乗つて持つた。

銘旗が風に翻つた。

棺は坂の上まで行つて、少時後から續く行列の整ふのを待つた。行列の順序を世話する役目の縮髭の紳士は、てんでこ舞をして女連を車に乗せて居る。——やがて行列は續いて棺は動き出した。家に残る人々は門前に立つて長く見送る。隣の老婆も坂の下の處に出て居る。近所の人々の中には、『あの難かしい婆様も居なくなつて旦那はこれから仕合せ！』など言つて居るものもあつた。

喜久井町の通では皆原の家を知つて居た。白髪頭の齒の抜けた難かしさうで、そして他人には丁寧なやさしいお婆さんをよく知つて居た。で石屋車屋、理髮屋、烟草屋の亭主やら紳士やら皆な店頭に出て、其行列を見る。角の氷屋の意氣な姉妹も出て居た。

一町ばかり来ると、林木屋の娘が朋輩らしい十六七の娘を伴れ立つて、此方に歩いて来たが、葬式の行列を見て、

『そら、酸漿のお婆さんさ！』

『さう……』

と他の娘も立留つた。

途中は長く暑かつた。それに風の強い日で、青山の練兵場は黄い埃を揚げて、銘旗がばたくと音して、徒歩の群は半ば後れ勝になつた。

共葬墓地には吉田の家にとつて縁故のある墓が少くない。祖父、母、嫂の子、それに總領の姉も此處にあつた。益とか彼岸とかには同胞は母

親と一緒に墓参をした。早く死んだ總領の娘の墓に母親は秋の草

花を手向けて泣いたことがある。交番の前の藤柳の茶屋櫓と線香とを

買つて、手づから桶を下げて墓と墓との間を縫つて行くのが常であつた。

其頃は秀雄はまだ少年で、歸途には屹度青山の練兵場を銑之助と競走し

て驅つた。原の外れの一株の銀杏の樹、其蔭にはいつも荷車や俵が五六

盛休んで涼んで居たが、其處で兄弟は後れた母親の來るのを待つた。

長兄はそれよりもつと以前のことを思ひつゝ歩を運んだ。まだ練

兵場にならぬ前古い屋敷と古い町櫓の低い商家が連つて、衰頹の氣が巴

渦を巻いて居た。其町に六道の辻といふ處があつた。其處を姉——力

にした姉の葬式の行列に跟いて行つた時のことを思ひ出した。

青山の齋場では神官が傳記に似た祭文を朗讀した。神道の式は簡單

ではあるが、何となく人々の心を動した。

會葬者の中には父親の舊友が少くとも四五人は居た。根岸に居る時

分よく酒を飲み合つた連中である。一人は警部長、一人は本郷の區長に

なつて居た。長兄が和文で書いた弔詞を讀上げる時、『昔な成長くなつ

てかうして立派な葬式を爲るやうになつた！吉田が生きて居たら、さぞ

喜んだらうに』と思つて、軍服を着けた秀雄が悄然と頭を低れて居るの

を見た。

式が済むと棺は墓地へと運ばれる。三坪の狭い要垣の中に數箇の墓標は半ば朽ちて祖父のなどは雨風に全く腐れ果て居た。十年の間に四度の葬式先妻の墓石の他に祖父母の墓石を建てたいといふ願は常に主人の心にあつたが貧しい苦しい生活ではそんな餘裕は無かつた。乳房で壓されて死んだ子の墓標と先妻の墓石との間に母親の墓は選れて掘つた穴の赤い土が山を成して居た。土に塗れた人足は棺を受取るや否細引を懸けてするくとそれを穴に下した。土塊の棺の上に落ちる音がする。

親戚知己は皆な土塊を拾つて穴に投げ入れる。瞬く間に墓は築かれて、新しい墓標は楓椿などの繁茂を明るくした。一同は形の如く水を手向けて葬式を終つた。

親しい人々は藤棚の茶屋の奥座敷に休んで茶を啜つた。銚之助は長

押し懸けてある油畫を立つて見た。主人は義兄と襖の名家の書に就いて話した。ある事業を終つたといふやうな満足は誰の胸にもあつた。家に歸つてから床の間に飾つた位牌の前でしるしばかりの酒宴があつたがやがて親戚の誰彼も暇を告げて歸つて、一同は連日の疲勞に死んだやうになつて熟睡した。

夜深く神前の蠟燭は消えて居た。

三十四

暢氣な平凡な日が續く。母の居なくなつたことは何となく淋しい。殊に銚之助には其感が深かつた。何うかするとまだ其處に寝て居るやうに思ふ難かしいことを言つて居るやうにも思ふ……。何んなに難かしくツても生きて居て呉れた方が好いなどとも思つた。母の面影はまだ其暗い家の軒を離れなかつたのである。

墓参には交るゝ行つた。三日目には墓前の生花が全く凋れ果て、居た。家では主人が同胞と一緒に亡き母の遺物の整理をしたが、其中からは古い鏡やら帳面やら古金銀の包やらが出た。小さく包んだものも何かと展げて見ると、それは子供等の産毛と臍の緒で主人のも銚之助の別にも同じ小さい紙包があつた。それは父親の遺髪であつた。これを見るときも、暫くして長兄が笑ひながら銘々にそれを渡し、

『お米のは何うして無いんだらう？』
 『皆なの臍の緒を己が持つて居たつて仕方が無いから皆なに返すぞ』
 『私のは私が持つて居るよ。東京に皆なが出て来る時お前のはお前が持つてお出でつて母親が私に渡して呉れたから』

『さうか、それなら好い』



「臍へその緒なはも自分じぶん自分じぶんに保存ほぞんしなけりやならなくなつたんだナア、もう』
と悲かなしさうに銚せん之の助のが言いふと、

「それはさうさね、お前まへ。いつ迄までそんなこと言いつて居ゐられるもんかねえ。
お前まへだつてもうちさお父ちち様さまになるんぢやないか』
とお米こめは笑わらふ。

古こ金かね銀ぎんは二に朱しゆ金かねが五ご枚まい、二に分ぶ金かねが十じゆ枚まい、一いっ分ぶ銀ぎんが五ご枚まいほどあつた。秀ひで雄をと

は二に朱しゆ金かねを頻しばしばりに弄もつて居ゐたが、

「僕わがは何なにも形かたち見みは入いらんから此こゝを貰もらひ度どいな』

「それを何なにうするんだ』

「指ゆび環わでも拵しらへさせるさ』

「お前まへが指ゆび環わをはめるのか』

「どうせいゝ人ひとに遣やるのさねえ！』と銚せん之の助のは傍かたから冷ひやかした。

「いゝだらう、兄あに様さま！』

「するいするい……。秀はするいよ」とお米は言った。
 「好いさ！ 僕は貰うんだ！」と秀雄は猶それを弄つて居た。
 同胞は形見分けの相談をした。母は平生衣服などを餘り多く持つて居なかつた。好いものは總領の娘とお米とに既に大抵は遣つて了つた。秀雄が士官學校を卒業した時にこしらへた紋附位が先づ重なるものである。主人はそれをお桂に遣る下心らしく、お米は自分がそれを貰う権利があるやうに思つた。二人の暗闘はこれにも起つた。

三十五

十日祭の前夜には重立つた親類が皆集つて賑やかな酒宴があつた。明日御墓参をして、秀雄もお米も國に歸ると謂ふので、晝間それ〱形見分をする。母親の紋附はお米が貰ふことになつた。
 長々の看病御苦勞だであつて、今日は女連も皆な座敷に直つて膳に就

いた。八時頃には客は大方酔つて折包を持たせられて歸つて行くものもあつた。

座は既に白けた。

ふと主人が氣が附くと、お桂は済まして膳に向つて頻りに酒を飲んで居る。飲むと言ふよりも寧ろ呷つて居る。顔は眞赤になつて、物に激した調子が名残なく其態度に顯はれて居た。少し離れて坐つたお米の顔にも何となく不穩の色が上つた。

「お桂！」

と主人は呼んだが返事も爲ない。

「お桂！ 馬鹿をするな！」

と續いて言つたが、聞えぬ風をして、徳利を手にしたまゝ、頻りに盃に酒をつぐ。

「お桂、お前は聞えないか！」

此聲が甚だしく尖つて居たので、お米は險のある赤い顔を主人の方に向けた。

「嫂さん中々御酒が行けるんですねえ？」

ふと傍から言つたお米の言葉には冷笑の調子が籠つて居たので、

「え、え、酒なんかいくらでも飲めますとも！」

「お桂、馬鹿をするなといふに」

「い、ちやありませんかねえ。酒位飲んだつて本當に馬鹿々々しい。自分一人で看病したやうな顔をしさがつて……酒々として……」

「何ですつて、嫂さん」

とお米は屹とした。

「何ですもあるもんかねえ。何方が姉だか解りやしない……」

席は少時沈黙に落ちたが避くべからざる暴風は遂に來た。

「嫂さん、今一度言つて御覽なさい。何ですつて、碌々世話もしない癖に

……。人の親を死ねがしに扱つて、嫂さんなどに取つちや一刻も早く死ぬ方が好いだらうけれど……私には大事な親だからね」

「誰が死ねがしに扱つたぢやかねえ？」

「誰だか心に聞いて御覽」

「さういふお前さんこそ……」

「私は何うしたえ？」

「人の家に入つて來て勝手なことをして自分一人で看病したやうな顔をしやがつて……。あきれた女ぢやがナア」

「大きな御世話だ」

「お桂！ お桂！ 黙つて居れ！」と主人は聲を厲した。

「黙つて居られるかねえ。こんなに馬鹿にされて……」とお桂は泣聲になつて、「人を散々踏付けて勝手なことをされて、私や口惜しい！」と忽ちお米に武者振ついた。

隣にある膳の皿やら茶碗やらが滅茶々に壊れた。主人が慌て、それを留めに中に入つた時はもう遅かつた。お桂はお米の胸倉を取つて手を舉げて亂打した。お米も負けずにお桂の髪を攫んだ。席にあつた人は總立になつた。何事かと勝手からお駒も飛んで来た。主人と義兄とがやつと二人を引分けた時には、お桂の髪は滅茶々に壊れ、お米の顔には爪の痕があつた。

「放してお呉れよ、嫂も養もあるもんか。お位牌の前だから勘忍して居れば好い氣になりやがッて……」と頻りに罵りながら執られた袖を振放たうとするお米を押すやうにして銃之助は四疊半に連れて行つた。後を見送つて。

「大きなお腹をして本當に危いよ！」

と義兄が言ふ。その言葉には笑つたやうな調子が籠つた。

主人は黙つて居た。妻の無法を羞かしく思つたらしい。秀雄もお梅

も吃驚して立つて見て居た。お駒は「何んだらうね、まあ大きな風をして、喧嘩なんぞして、呆れたものだよ」

お桂も一時の感情が覺めると流石に羞かしい。けれど夥しく酔つて居る。前の船乗の夫の仕込で酒を飲むことは覺えて居るが、こんなに酔つたためしは無い。険しい顔に青く眼は据つて居た。

でも何うやら彼うやら白けた席がまた賑かになつて、やがて駄洒落を言つて面白げに笑ふ主人の聲が賑かに四邊に聞えた。

三十六

墓參を済しての翌日、お米は淋しい心を抱いて母の家に別れを告げた。田舎の家の生活も辛い、十年以上連添つた夫も頼みにならない、けれども二度と再び此家の閥は跨ぎ度くないと思つた。もう親の家では無い、兄の家だ！ お別れに今一度位牌の前に線香を上げた。細い煙がすう

と青く立上る。お米はそれをじつと見て居たが堪らなく悲しく心細く
なつて、涙は我知らず霞のやうに袖の上に落ちた。

お米は大きな風呂敷を俵の蹴込の下に、メリンス友禪の單衣を着た女
の兒を八月の大きな腹の上に抱えて、主人と銑之助と秀雄と其他の女連
に見送られて別れて行くのであつた。

秀雄も發つ準備をした。靴の中には娘に贈物の半襟と帶留娘の弟妹
に遣る繪本とリボンなどが入られてあつた。酒呑の中隊長に頼まれて、
新橋際の大きな陶器店で豆腐鍋を買つたが、さてこれを填さぬ様に何う
して持つて行かうかなど、苦心した。榮太樓の甘納豆玉だれなども其
中であつた。

暑い日であつたが何となく秋の氣が空に満ちて居た。目白の停車場
まで銑之助が送つて行くと言ふので俵には荷物だけを載せて兄弟は歩
く。

亡き母のことや嫂のことや長兄のことやお米のことなどをいろ／＼
に語り合ひながら、軍服を着た秀雄と白地の浴衣にへこ帯をしめた銑之
助とは、戸塚町の軒の低い貧しい商家の家並の午後五時過の日影を拾つ
て行つた。

面影橋に曲る道の角あたりで、何うした調子か、秀雄は娘の話を始めた。
銑之助はざつと聞終つて、

『それは好い、それは好い』

『何うも親類が難かしいから、旨く行かんかも知れんけれど……』

『なアに大丈夫だ。此方の考さへ決つて居りや……』

『それはもうさうする積りなんだけれど』

『それは好い！』

と銑之助は其身のことでもあるやうに喜んだ。
秀雄は種々のことを包むところなく語つた。勿論軍人の訥辯で話し

た積でも充分に其戀物語を傳へることは出来なかつたが、しかし銑之助は自分の想像で迎へて聞くので其消息はよく解つた。

「折があつたら、兄様にも話して置いて下さい」

「よしよし」

「何うせ話を進めれば、兄さんや銑ちゃんに世話にならんけりやならん。だから僕からも兄さんに言ふけれど……」

「よしよし」と點頭いて、「早く決める方が好いちやないか」

「だつて、少尉ちや食つて行かれないからねえ」

「そんなことは無いさ」

「それに、公然の結婚となると、保證金も要るし……」

「さうく、さういふ厄介ものがあるね」

「だから、今一二年中尉になるまでは結婚は出来ないけれど……」

「もう、今年の暮あたり昇進するんぢやないか」

「旨く行けばさうだけれど、競争者が多いからねえ」

面影橋をもいつか過ぎて、兄弟は雜司ヶ谷の通に出る低い坂を登つて居た。

「寫真があるだらう？」

「うむ？」

「歸つたらすぐ送つて呉れ。未來の義妹に早く御ちかづきになりたいから」

秀雄は躊躇して居たが、「實は持つてるよ」

「持つてる！寫真を」

「うん」

「ちやお見せ！」

「靴の中に入れてあるから、停車場に行つてから……」

銑之助は笑つて、「それなら早く見せれば好いのに！」

「だッてそんな氣になれなかつたもの」
 通に出て肴屋荒物屋馬具屋桶屋などの軒を並べた場末の汚い町を抜
 ると、潤々とした野の上に、秋近い白い雲が靡いて、榛の並樹で縁取つた田
 舎道を空車の音が高く響いた。

停車場は空いて居た。時計を見ると、時間まではまだ二十分ほどある。
 切符もまだ賣出さない。銑之助に促がされて秀雄は鞆を明けて書籍の
 間に挿んで置いた光子の寫眞を出して渡した。銑之助の眼には可愛い
 眼をした小づくりの娘の姿が映つた。

「何處か中町の絹さんに似てるね」
 「うん！」

と秀雄は顔を赤くして、仲兄の手から寫眞を取つた。中町の絹さんは
 秀雄の幼馴染である。

待つ間程なく汽車が来る。若い士官は劍鞘を鳴して二等室に入つた。

場末の停車場は乗降の客も少く、車掌が手を舉げて笛を鳴すと、すぐ動き
 出した。

秀雄は窓から顔を出して、停車場に立つて居る白地の浴衣姿を小さく
 なるまで見て居たが、やがて線路が曲つて見えなくなると、そのまゝ腰を
 下して、隠袋から寫眞を出して、飽かずその姿をながめ入つた。汽車が赤羽
 に着く頃銑之助は淋しい顔をして、高田の穴八幡の傍の坂を降り懸けて
 居た。

三十七

お駒も歸ると、跡は静かになつた。主人とお桂と男の兒と夕飯の膳も
 さびしい。

男の兒は箸を置くと、其儘急いで遊びに出て行つて了ふ。夫婦は黙つ
 て飯を食つて居たが、それも済むと、主人は床の間の神前に線香を添へて、

庭から井戸端の邊を逍遙する。お桂は水を汲んだり跡仕舞を爲たり、襦袢になつて甲斐々々しく働いて居たが、洋燈が點く頃二人はまた長火鉢に相對して坐つた

主人は煙草を一服吸つて、トンとはたいて、

「まア、これで済んだ！」

「随分の騒ぎ……」

「お前も大變だつた」

「本當にねえ、此間など私つくづく厭になつて了つたがねえ」

「でもお前も中々隠藝があるナ」と莞爾する。

「隠藝ツて何んぢやね」

「あんなに酒の曲飲が出来るとは知らなかつた」

「何ぢやね、阿房らしい」

と打つ眞似をした。

二人は始めて一家の主人になり得たやうな心地がするのである。かうした鳥渡した戯も今迄は決して出来なかつた。夫婦の愛情を少しでも表面に顯すとすぐ厭な眼で睨まれた。主人など殊に其感が深い。他所の夫婦は睦しさに縁日に懸けて行つたり、一緒に三越に衣服を買ひに行つたり、思ふまゝの快樂に耽つて居るのに……其身ばかりはさうした甘い味も全く知らずに難かしい口小言と衝突と暗闘とにあたら月日を送つて來た。主人は今更のやうに一人は死し一人は離縁した先妻を氣の毒に思つた。

「お前なぞ仕合せだ」

「何故ぢやね」

「もうこれからは樂が出来から」

「お雪さんを又思出したのかね」

「馬鹿な」

「だつて此間の手紙ッたら厭ッたらしい見られやしないがね。樂が出
来るやうになつたからお雪さんと呼んで上るが好いちやがねえ。」

「お前は何うする！」

「人に散々苦勞をさせて阿房らしい」

と、今度は本當に膝の處をビシヤリと打つた。

主人は笑つて居る。

賑やかな笑聲が原の家に聞えるやうになつた。隣の細君は例の若つ
くりで絶えず遣つて来ては面白さうな話をして行く。眼の悪い老婆も
縁側に來て、用も無いのに長い饒舌を續ける。お桂の甥に當る早稲田の
學生も今度は一度も來たことも無いのに往歸にちよいちよい寄るやう
になる。生活状態は時の間に全く一變した。

三十八

秋は來た。露は草の葉にしとくに置いて蟲の音が物哀れに垣根に鳴
く。月の明かな夜が幾夜か續くと今度は冷たい雨が蕭々と降つた。

鉄之助はさびしい思をして居た。下の家はもう兄の家嫂の家になつ
て了つた。丁度其頃かれは最初の小文集を公にするつもりで出版元か
ら日毎に送つて來る校正を見て居たが最後の一巻を終つて序文を書か
うとしたのは母の四十日の祭を済して歸つて來た夜であつた。晴れて
は居たが開で天の河が明かに空に横つて星が閃々と輝いて居た。

理由なしに涙が滴れる。子の爲めに親は其總てを盡した。子は親の
爲めに果して何を盡したか。母は難かしかつた。けれど難かしい以上
に温情であつた。われ等の爲めに真心から悲しみ真心から憂ひ真心か
ら怒つた。難かしかつたのは優しかつた爲めである。……であるのに、
子等は何を以てこれに酬ひた？
人間の淺ましさが今更のやうに背と胸に迫つた。少時して思返して、

「けれどこれが人間である。これが自然である。逝くものをして逝かしめよ、滅ぶべきものを滅ばしめよ。」

茫然として涙が溢れた。

思返して序文を書いた。和文調で母の死に逢つた悲哀を叙した。「これよりは時雨降り、木の葉散り、さらでだに悲しき秋を、かしの實のわれ唯一人に、いかに侘しき世をば経べき」と書いた。最後に、

「大なるめぐみに酬ゆべきもの無し、せめてはこのはかなき小さき文をだに御前に奉らばや。」

かう書いて筆を置いた。まだ涙がかれの頬を傳つた。かれは大きい手を顔に當て、歎げた。

垣根では蟲が頻りに鳴く。

其處にお梅が来て、

「何うしたんですの？」

「母様が死んで了つた。もう一人だ」

見ると夫が泣いて居るので、お梅も悲しくなつた。慰むべき言葉も出ない。

「もう一人だ！」と銃之助は繰返して言つて、「もう力になつて呉れるものは無い。お前と二人で此世の中を渡らなければならぬ」

お梅も催されて泣いた。

少時は沈黙に落ちた。

やがて、「本當に力になつて下さる母様でしたのに……」とお梅は言つて、「けども、もう仕方がありませんから……二人で一生懸命に、どんなことでもして」

二人は始めてうき世の波に觸れたやうな痛切な悲哀を感じたのである。夫婦としての意味以上に、ある力強い密接な關係がかれ等の上に生じた。

お梅は丁度六月である。
 五十日に今一度お祭があつて、一家揃つて墓参をした。床の間に飾つた神壇は其日を限り撤せられて位牌は父親の靈の祀られてある家の神棚に加へられた。主人に手向けた花は暗い家を明るくした。

三十九

二年経つた。原の家はもう原の家ではなくなつた。老百姓夫婦の借りて耕した畠も宅地になつて縦横に路が附けられて新しい家屋が幾軒となく建つた。和洋折衷の下宿屋も出来れば大きな門構の板塀圍ひの二階屋も出来る。路の角に新につくられた共同の井戸には近所の女房連が終日長く饒舌を續けた。

北に寄つた小路の奥に小さな門の四間ばかりの新建の家屋があつた。狭い庭には樹も無ければ草花も無い。玄關の格子を明けると綺麗にみ

がいた長靴と短靴とが置かれて出来て買つて来た下駄箱には縮珍の鼻緒のすげられた新しい女の駒下駄が入られてあつた。毎朝風く軍服を着けた中尉が靴の音高く出勤すると後では子供の啼聲がして若い細君が頻りにそれをなだめる氣勢がする。若い細君は光子であつた。

二人の戀愛問題は中々難かしかつた。老祖母の反對親戚の反對これも随分烈しかつたがそれよりも一層困つたのは田舎新聞が何處から何う材料を探し出したか光子の懐妊した話を其紙上に麗々しく掲げたことである。で大騒ぎになつて手紙が原の家に来て母親の死んだ翌年の二月主人は弘前に出懸けて行つたが一緒に伴つて来た光子はもう六月の大きな腹をして居た。光子はなつかしい父母なつかしい戀人に離れて二百里の都に二人の嫂に介抱されてその母親の死んだ八疊で男の兒を分娩したが其年の秋には何うやら彼うやら話が纏つて公然秀雄と結婚することになつた。それに秀雄は翌年の春戸山學校に術科研究の爲

め隊から派遣されることゝなつたので、それで取敢へすこの兄の家の近所に家を持つたのである。

光子は美しかつた。それに性質が優しいので、近所でも評判であつた。唯弘前なまりが容易に取れぬので、いつも嫂達に笑はれる種をつくつた。

兄弟三人——三軒の家は一家のやうに睦しく往來した。男達が交る交る御馳走を拵へさせて酒を飲むと、女達は男達に留守番を頼んで、一緒に神樂坂の縁日に出懸けた。

裏の家では女の兒が産れて、お梅がねんねこで負つて、其處等を歩いて居るのを常に見懸ける。銑之助は母親の死んだ年に、思想上に少なからぬ變化を來して、自から進んでなにかし雜誌社の編輯員になつて、今でもわづかの俸給で、毎朝風呂敷包をかゝへて出勤して居る。長兄の洋服姿も依然として淡竹の大藪の向ふにてくく歩いて行く。

ある日曜に、光子は縮緬の衣服に縮緬の羽織といふ立派な扮装で、同じ

く盛装した兒を抱いて下の家へと出懸けて行く。

「もうおつくりが出来たのかねえ、まあ綺麗にねえ……」とお桂は迎へた。

「上の嫂様もまだ入らつしないの？」

「え、え、まだ來ませんがねえ、もうちき來るでせうよ」と子供の衣服を見て、「よく似合ふのねえ！」

「いゝえ」

と言つたが、座敷の机に坐つて居る長兄の前に行つて、「兄さん今日は……」と丁寧に挨拶する。

今日は女連が三人お揃で、九段の鈴木に行つて、紀念の寫眞を撮らうといふのである。

やがてお梅も綺麗に粧つて女の兒を抱いて來た。女の兒は友禰縮緬の美しいのを着て、莞爾して居る。

相變らず扮装の話が出る。やれ帯留が好いの半襟の色合が好いの櫛が好いの簪が好いのと際限が無い。光子が金の指環を二つ迄はめて居るのを、お桂もお梅も羨ましいことに思つた。

お桂は二人を待たせて支度を爲た。鏡の前に立つて、髪を頻りに直したが、生れつきちいれ毛の何うも思ふやうにならぬので、肝癪を起して、「本當に厭になつて了ふよ」と焦れて見たが、仕方が無いので、大抵にして衣服を着た。じみな鼠か何かの紋附で、帯もよく見馴れた緞珍の丸帯である。

でも、袴削なので、鳥渡後姿が好い。

「嫂さん、よく似合ますよ」

とお梅が言ふと、

「え、え、よく似合ふでせうとも！髪がべちやんこで、衣服がお古のおゆづりと來てるぢやかね」と言つて、帯をキウと堅く緊めて、「旦那様が

今少し働きがおあんなさると好いんぢやけどねえ」

「まあ、嫂さんがあんなこと！」

と光子は笑つた。

支度が出来て、俵が來て、いさ出懸けやうとする時、主人が、

「歸りに土産を澤山買つて來るんだよ」

「はい、かしこまりました」

とお桂は茶化したやうにいふ。

俵なので、存外早く、午少し前には、三人は寫眞を撮つてもう歸つて來て居た。紅谷のあんころが土産であつた。主人が自から立つて來て茶を淹れる。寫眞屋の話が始まつた。室が立派であつたの、顔の生えた寫眞師が可笑かつたの、何處かの華族のお嬢さんが馬車で撮影しに來て居たの、ダイヤモンド入の指環が立派だつたのと話は容易に盡きなかつた。一週間に其寫眞が郵便で届いた。割合によく寫つて居た。立つた

光子の一番立派で眉の長い細面の丸顔姿がすつきりとして居た。男の兒をお桂が抱いてお梅は自分の兒を膝にして二人並んで腰を懸けた。女の兒の笑顔がいかに可愛らしかった。

寫眞の話が一時三軒の家を賑かにした。いろくいな批評が出た。お梅の眼色の可笑しいのを言つたのは秀雄で光子の手附の變てこなのを見出したのは銑之助である。お桂の位置の取りやうが悪かつた爲め顔が烏渡別人のやうに見えるのを、『今少し傍に寄れば好かつた』と主人が言つた。

『一番好く寫つた人は、御前をたんと出すが好いがね』とお桂はキヤツと笑つた。

序に寫眞を藏つて置く小箱が其處に展げられる。明治の初年に大阪で撮つたといふ大小を差した父親の寫眞はもう黄く薄くなつて居た。それに兄弟が三人揃つて撮した少年時代の寫眞誰れだか解らぬ丸顔の

生

終

女と一所に撮つた中年の頃の母親の寫眞死んだ叔母の寫眞娘の寫眞總領の姉の寫眞は其頃流行つた種板其まゝの硝子製で木の框の壞れて取れたのを丁寧に母が白紙に包んで藏つて置いた。其の他に昨年英男と一緒に寫した母親の寫眞が一枚あつた。兄弟は皆なそれを手に取つて見た。

Handwritten notes in Japanese, including the date '九月十九日' and other illegible characters.

明治四十一年十一月二十日印刷
明治四十一年十一月廿五日發行

生奥付
定價九十五錢

著者 田 山 花 袋

發行者 西 本 波 太

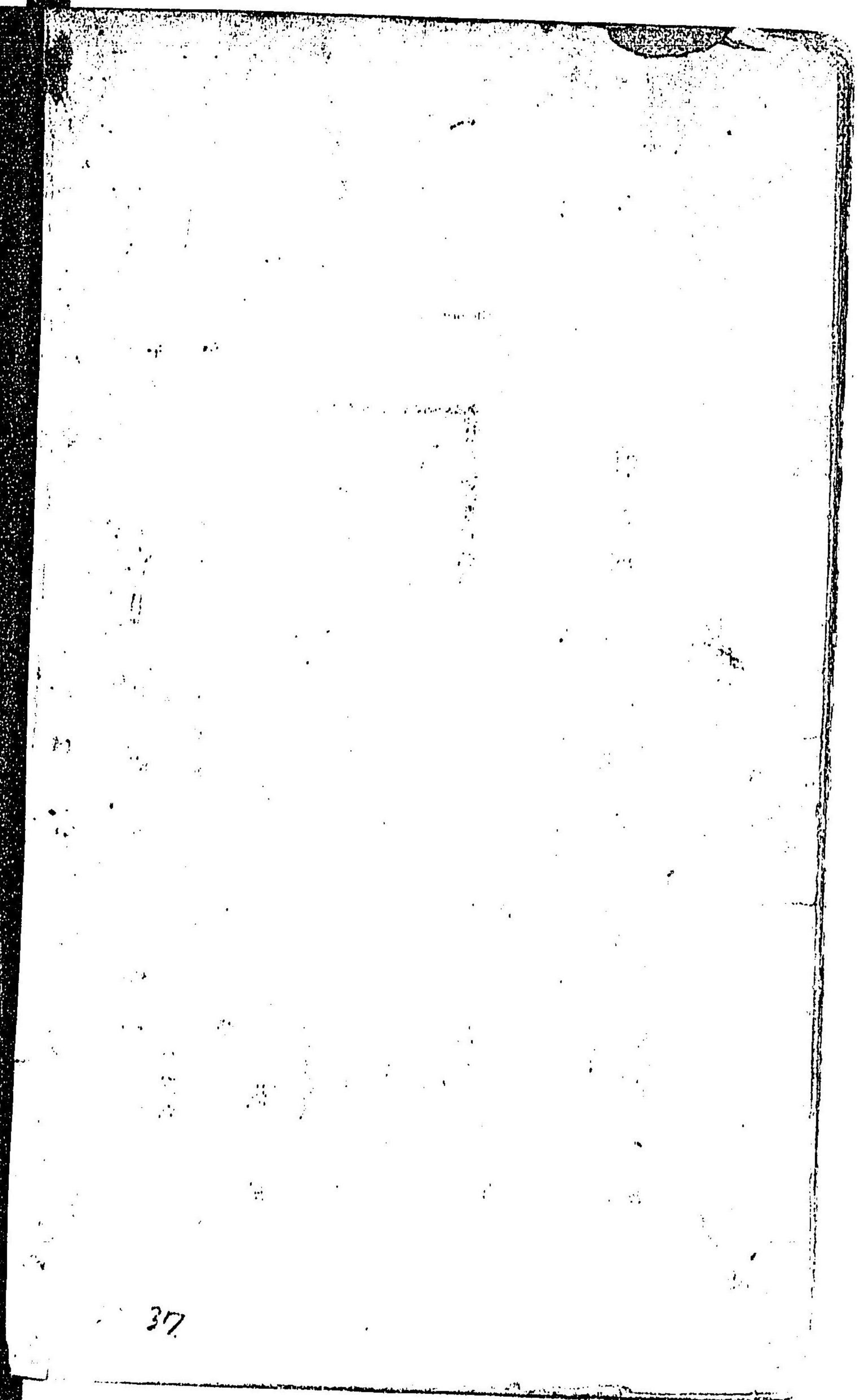
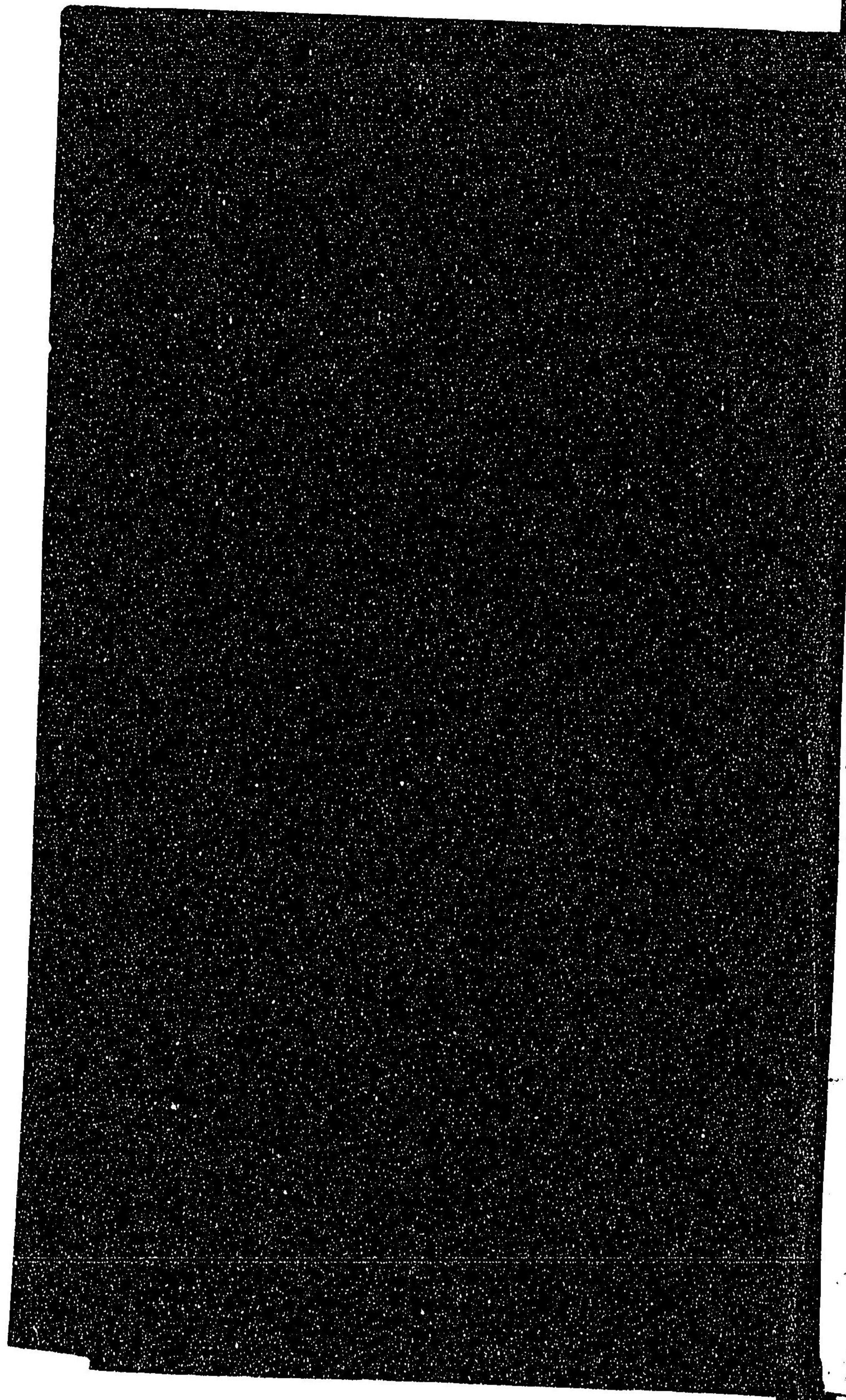
印刷者 山 田 英 二

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
博文館印刷所



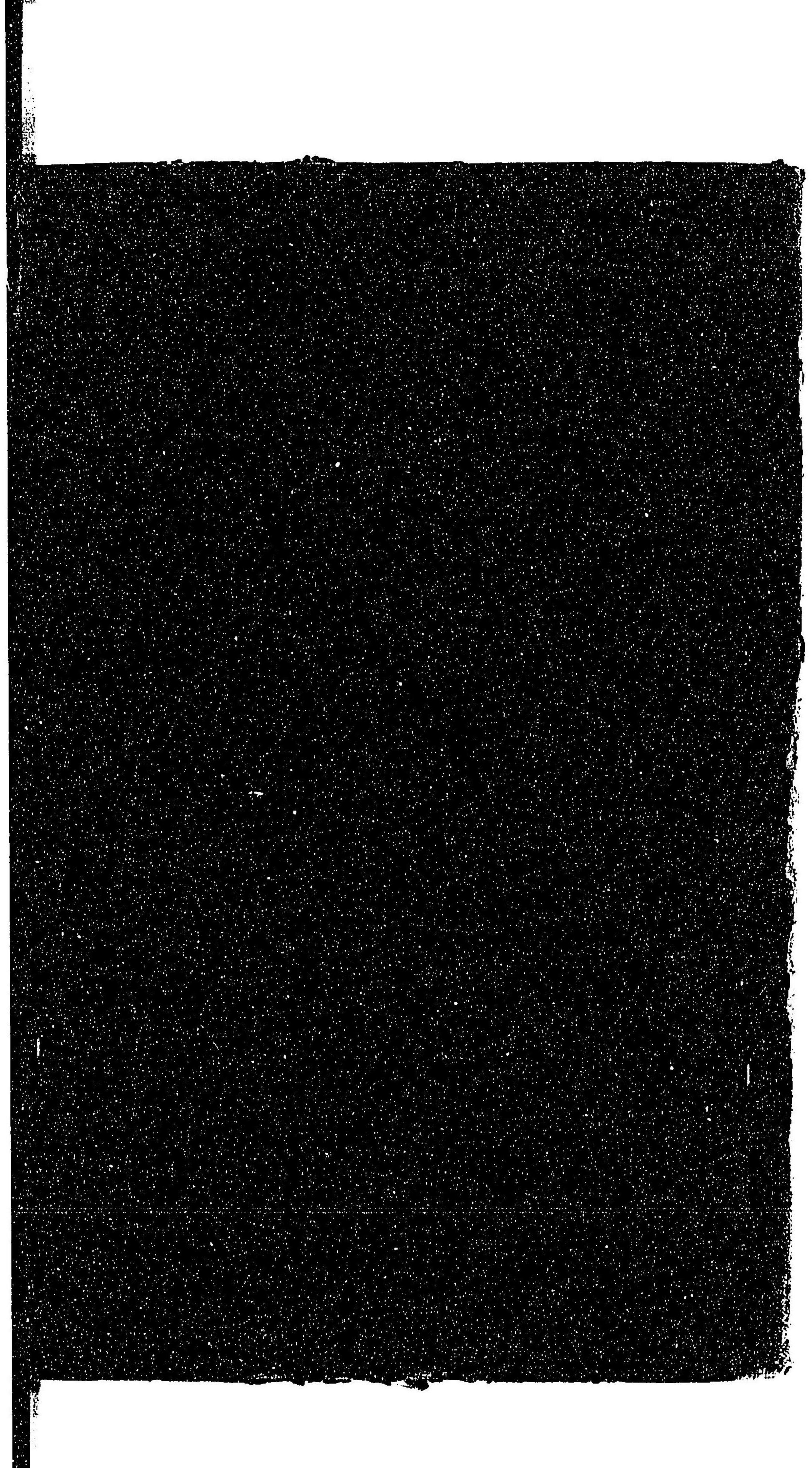
發行所 東京麹町區飯田町
六丁目二十四番地
易 風 社

振替口座 二〇三三四番



37

93
301



93
301

094248-000-5

93-301

生

田山 花袋/著

M41

DBQ-1738

